# 文化活動の流れ
## ——福生町時代——

橋本孝蔵

福生市がまだ福生村熊川村組合村であった昭和の初期（昭和十年・人口六三七〇人）、その頃の文化活動は、青年団が中心になっていた。

いわゆるエロ・グロ・ナンセンス時代であり、経済不況のどん底で、その中で青年団は農村更生問題を論じ、団員相互の教養を高めるための活動を行なっていた。

### 戦前の青年団の文化活動

昭和九年ごろ、青年団の各部の主なものは、教育部、修養部、文芸部、競技部、武道部、産業部となっていた。それが、昭和十四年になると、日華事変はしだいに深みに入り、新体制運動が起り、戦時色がしだいに濃くなって来て、青年団の各部も、修養部、産業部、体育部、事業部と変わり、文芸部と言う名称は残されていない。

戦前の青年団の集まりでは、一夜講習会、幹部講習会と言う名称がよく使われた。そしてその多くは、上部機関から講師を頼み、一冊の本をその場で輪読し、語りあうという形式の、読書会





とは言えないが、そのようなものが持たれた。現代の若者からみれば、思想統一などと大変だったろうが、多くの青年は、この集まりで心の糧を得て成長した。

競技部が単独で設けられていたのは、当時、運動会——主として陸上競技——がいかに盛んであったかを物語っている。九月に入ると、学校の校庭に外灯をつけ、ほとんど毎夜、夜間練習を行ない、支部対抗から熊川、東秋留（秋多町）、多西（同）、羽村と隣村の運動会にお互いに招待されて、四百米リレー、八百米リレーに出場し、優勝旗を争った。そして十月二十日は、毎年郡の青年団の運動会で、当時の青梅町を含め、二十三カ町村が覇を競い、これはまさに老若男女、全町村を挙げて、応援に馳せ参じたのである。

昭和六年——九年頃活躍した選手に、短距離で福井繁次郎氏がいた。なにしろ、当時としては標準よりはるかに背が高いので、俗に〝カイノ〟と言った。〝たかいの〟が〝カイノ〟になった？。

百米ではいつもトップだった。もっとも彼は、スタートでやまをかける——ピストルの音より早く出る——のがうまかった。横田寿夫氏もよく走った。四百、八百では田辺光一、嘉一の兄弟は、郡でも恐れられていた。

変った大会として、福生、熊川、東秋留、拝島（昭島市）四カ町村対抗競技が春に行なわれた。どうして郡の違う拝島青年団と一緒に行なったか、よくわからないが、おそらく青年らしい純粋

さが、隣村ということで結びつけられたのだろう。

その後、昭和十三年頃から、戦時態勢が深まって来るにつれて、運動会から体育大会と名称も変り、種目も、俵かつぎ競走、手榴弾投などが入って来た。

昭和十五年、福生が町になった年の十二月一日に青年団の町制祝賀体育大会が行なわれた。その時の選手をみると、福生で井上重男、大野行夫、遠藤竹蔵、保坂芳夫、高崎行雄、石川信三、田村清作、熊川は森田正、高橋弘喜、小林暢吉、野島登、斎藤享氏等、現在市の中堅で活躍している方々の名がみられる。

しかし、この大会がおそらく最後で、しだいに団員の多くは出征し、あるいは軍需工場に勤めるようになり、開催形式も動員大会と言う名称に変わり、スパイク禁止となり、お祭り的な楽しい運動会の姿は消えて行った。

## 素人演芸大会

素人演芸会も盛んで、当時秋多町二宮に歌舞伎をやる村芝居の一座があって、そこから指導をたのみ、荒神山の吉良の仁吉、国定忠治等がよく演ぜられた。日華事変が始まると、名称も出征家族慰安会と変わり、特に当時の第五支部（本町関係）は、商店が多いだけに派手でうまかった。昭和十三年の〝五人の斥候兵〟はなかなかもてた。その後三年にわたり、この劇が行なわれたが、





主役は島田福三氏で、その巨体？が部隊長にもってこいであった。

昭和十四、五年頃、時代劇は飯田慶太郎氏主演の荒神山などが圧巻であった。しかし女子が出演しないために、友野平八氏らが女形（おやま）をやった。森田喜一氏も演技派で、悪役でもなんでもこなした。とにかく団員で少しできそうな者は、役を割当てられるので、当時、多くの人が舞台を踏んでいる。そして、それら好青年の多くが、戦場で散って行った。

## 学生会の活動

昭和五年頃、旧制中学以上の学生で組織されていた学生会があった。当時四十名位のメンバーであった。

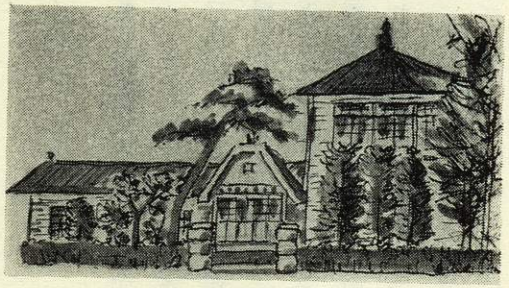
その学生会がハーモニカバンドを組織し、演奏会を第一小学校で行なった。なにしろ、楽譜もあまり読めない連中の集まりであったが、休日になると集まって練習した。それでも編成は、第一、第二ハーモニカ、バリトン、バスで、曲目も〝天国と地獄〟〝カルメン序曲〟などかなりの曲を演奏した。中心は横田寿夫氏、熊川の片岡氏で、メンバーには原島弥七、田村唱作、田村弥三氏などいた。私はおかげで二中（現立川高校）の音楽部長に認められて、音楽部に入れられてしまった。

学生会のこうした活動は、当時なかなか画期的で、現在のグループサウンズの比ではなかっ

た。ラジオがまだ村に数えるほどしかない時代の話である。そのような時代で、しかも生の音楽を聞かせるのはハーモニカが一番手近でもあった。

学生会の活動は、更に青年団と共催で、弁論大会も年に一度行なった。この弁論大会がまた楽しいもので、青年倶楽部が満員となり、窓の外にも聴衆があふれ、ヤジが乱れ飛ぶ熱気の中で演説をやる。ヤジが勝つか、演説が勝つかであった。私も中学二年の時にやらされた。壇上に上るとまず〝水を一杯飲め！〟とヤジられる。少ししゃべり始めると〝そのへんで手をあげろ！〟とくる。演説の内容などどうでもいい、大声を出し手をあげジェスチャーたっぷりどなりまくる。そのため、川原で一週間も声がつぶれる程、だれもが練習したものである。しかし多くは「農村の不況打開のための問題」、「青年の生き方」等が論ぜられていた。三多摩壮士の名残りが、こんな処に見られたのかも知れない。

学生会はそのような活動と、更に玉陽チーム（野球）を結成し、実業団イーグルスと、福生の早慶戦と呼ばれる試合をよくやった。



福生青年団倶楽部（山崎茂男画）





学生会も、横田さんたちが就職されるとしだいに活動もにぶって来て、単なる親睦団体になり時と共に自然消滅して行った。

## 戦時中の青年団

昭和十六年、青年団は青少年団に改組されて、青年学校長（小学校長）が団長に就任、国家総動員態勢に入った。団員は次々と出征し、また多くの青年は、軍需工場に勤務するようになった。それでも月に何回か会合をもった。輪読会、幹部講習会は、練成会という名称に変わったが、職場から帰ると倶楽部に集まり、語り合い、戦時下の青年の生き方を求めて、生産増強運動と、郷土を守る運動等に活動していた。

そうした中で、八月一日の夏祭りだけは、平常通りに行なわれていた。特に終戦の年の二十年、空襲も激しくなり、団員も多く出征して少なくなっていたので、御輿をかつぐのも大変だった。町になった時からお祭りも各部落の御輿は神明社に集まり、長沢、加美、永田、中福生、牛浜、本町を通り、最後に第一小学校に集まり解散していたので、団員が少なくなると、なおこの渡行は大変だった。しかも、一番重い御輿が本町の第五支部で、果たして二十名程度の者で町内一周が出来るかどうか、心配であった。

当時の第五支部長の中野末男氏が、青年はどうせ戦争に出て戦死するかもしれないから、せめ

て御興を、最後の思い出にかつがせてくれと強く主張し、その意気込みで福生青年団は御興をかついだが、熊川青年団は自粛してかつぐのをやめた。その祭りの夜、八王子市が空襲され、福生にも焼夷弾が落された。熊川、牛浜で四戸焼失、福生はちょうど福生病院の裏手の畑に焼夷弾が落ち、被害はなかった。当時福生の青年は、御興をかついだから空襲を避けられたと、胸を張ったものだった。

## 戦後の動き

戦争が終わり、その年の九月上旬には、横田基地へ米軍が進駐してきた。そしてその駐留軍に対する勤労動員がされた。皆がおそるおそる横田基地に入ったものだったが、意外に案ずる程ではなく、煙草やガムを貰いながら働けるようになった。米軍に対する恐怖は、むしろ当時日本軍が中国で行なっていた、勝者が敗者に対して犯した行為に対する恐怖でしかなかった。

福生駅附近で、米兵をつかまえて英語の勉強をする者が多くなった。たしかに、最初に進駐して来た兵隊は、非常に訓練されていた。たとえば、私の家族、母や妻をさして、ユー、ユー、オールイコール……と言った。デモクラシーの基本の説明である。こんなことからも、皆たやすく米軍にとけこめた。

このような米軍進駐という福生の特性と、そして一般的な戦後の虚脱状態、食糧危機、社会不





安等の中に、戦場から多くの若者が復員して来た。そして自然とそれら若者は青年団倶楽部へ集まり、これからの生き方を論じ語り合った。山崎良之助、笹本保治、細谷利男、岸明、井上重男、竹島益夫等がその中心で、戦後の青年団が生まれた。その中で、いつも会合の記録をとり、それをガリ版印刷にしてくれた人が岩下伴蔵先生であり、それらの動きが、やがて郡の青年団を作る原動力になっている。

当時の団報第一号に、こんなことが書かれている。

「今こそ、吾々にも行動と発言の自由が与えられた。吾々は理想的な社会をつくるために、よりよき郷土よりよき日本を創る為に、過去の力と闘わねばならない……働くべき場所も充分にあり、発言も自由になった今、今こそ青年は自らも励まし、人も励まし、共に立ちあがる時です。大いにがんばりましょう」

そして、その後に、英語講習会（水・土で長沢クラブ）とか、女子の方々へ（婦人参政権説明会）等のお知らせが記されている。当時の青年の動きがよくわかる。

青年団は二十五歳までである。青年団に組織されない二十六歳以上の青年も、また、この時代を生きるために、いろいろな集まりをつくり、活動を始めた。

民主青年連盟もその一つで、田村福一氏が中心で、食糧危機突破座談会などを催し、実生活問題に取組んでいたが、何時の間にか消えてしまった。

## 武蔵明和会の活動

このような混沌とした社会情勢の中で、武蔵明和会の活動は特記すべきものがあった。

秋山武三、鳥海正吉、小林辰雄、田村祐一氏等の同級生が中心で、更に児島信一、中西虎蔵、塩野鉄之助氏等が参加し、町を明るくする運動を行なった。

安藤木工所から電柱にする材木の寄付を受け、会員の力で街角に外灯をつけた。この運動は約二カ年にわたり、七十数本の外灯を各町内に灯し、それは次々と地域の人に引き継がれ、今の外灯になっている。

## 戦後低迷期における文化活動

旧陸軍航空審査部や、軍に勤務していた軍人軍属であった人たちも、そのままこの土地に住みつき、更に新しく横田基地の拡張工事のために、間組等が進出し、労務者が集まり、福生の人口は急激に増加し、昭和二十二年には二万人を越えた。

そのような状況の下で、文学サークル〝あかざ会〟が生まれ、絵画グループ〝みどり画会〟そしてコーラス会など次々と活動を始めた。しかし、それもわずか二、三年で消えて行った。これらのグループは、土着の人々と、都内からの疎開でこの福生に住みついた人々との集まりであっ





たが、その中心的人物が、次々と福生を去るとともに、自然消滅してしまった。

そして一時非常に活発だった演劇グループも、立ち消えて行った。わずかに、青年団の読書会から独立して生まれた、道芝会がその後長く続いたのは、この土地の人々だけの集まりで、しかも地道に会の中だけに閉じこもっていたからかも知れない。

## 内田勇さんのこと……

福生の文化活動にふれる時、私は内田勇さんのことを思い出します。私の前に、福生青年団長をされていたが、たしか当時、西条八十が主幹していた『蠟人形』という詩の雑誌に、たびたび投稿されていた。私は若い頃、雑誌の中で内田さんの詩に接し、その格調の高い浪漫的な詩が、この人のどこから生まれて来るのだろうか、と感心しました。福生の役場に入って、内田さんに直接仕事を指導してもらうようになると、ますますその感を深くしました。

ひどい近眼で、度の強い眼鏡をかけ、ものをずばり言う。そして勉強されているので幅が広く、法律、経済、文学……と、いろんな書物を読んでおられた。総務課長になってからまもなく、若くして亡くなられたが、今でももし内田さんが生きておられたら……といつも思います。

当時の内田さんの詩を探しましたが、どこにも見当らず、ここに掲載できないのが残念です。

## 戦後文化活動の歩み

戦後の混乱期、福生町の文化活動は、日本中どこでもそうであったように、それはむしろ民主主義という、あたえられた新しい衣に対する生き方を求める文化運動であった。青年団活動にしても然り、その他種々のサークルもそうであった。

全国各地から集って来た女性が、吾がもの顔でアメリカ兵と手を組んで街を歩く風景、基地に勤めることによって、自然と身につけてくるアメリカの風習、基地の街という特殊環境は、ある意味では福生の住民をコスモポリタンにしていた。それだけに古くからの〝ふっさっ子〟と、終戦時住みついた人々との結びつきによる文化活動も、案外素直に行なわれたのかも知れない。

それでいてそれらの文化活動が、この土地に定着しなかったのは何故であろうか。

ともあれ文化運動が土地っ子である〝ふっさっ子〟と、よそものとの結びつきが、やはり根をおろすことが出来なかったのかも知れない。

そしてやがて朝鮮事変が起り、町は、そのブームに繁栄しながら〝子供の教育に悪い〟……という風紀上の問題も論議され、町をあげて、PTA、青年団、町会も含めて〝町を浄化しましょう〟という運動が起った。町や議会が先頭の運動ではあったが、その底には、PTA、婦人会、青年団等の底流があったからこそ、ここまで盛り上った。これはやはり大きな文化運動で、その





成果は大きく評価されるべきだと思います。

そして時は流れ、終戦時この土地に住みついた子らが成長し、土地っ子、他者（よそもの）という区別が自然と消滅し、あたらしい〝ふっさっ子〟が生れた。文化連盟も生れ、文化活動も活発になり、生花、お茶、民謡踊りまでが華やかに花をひらいて昭和元録を謳歌するようになってきた。

青年団は解散したが、それに代る、若者のグループも生れ、新しい文化活動の灯を燃し始めた。

しかしいつの世でもそうであるように、一つの灯をたやすことなく燃し続けるということは、どんなに困難なことであろうか。

一つの灯がつき、燃え、そして消され、消え、また次の灯が燃える。所詮文化活動とは、このようなものの積み重ねであるのだろうか。

ともあれ〝ふっさっ子〟は、基地の街という特性の中で育ち、都市開発の中で成長し〝市〟になり、新しい文化を生みつつある。

（福生市収入役）

# 福生における戦後の文化活動について

刈込一穂

昭和四十五年二月一日、中福生の雑木林に囲まれた茅屋に、福生珠算学校長山崎茂男氏の来訪を受けた。

春立つ日を目前にした、うららかな風のない日であった。話は、昨年五月、氏の編集発行にかかわる第一集『ふっさっ子』の第二集として、主として教育、スポーツ、文化等の面について企画し、発行するについての相談であり、その一翼のにない手として、戦後文化活動の面についての委嘱の相談であった。

まことにこれは朗報ではあったが、文才乏しく、四分の一世紀を経過した今日、記憶もおぼろげに、かつ当時を綴るべき記録も散逸し、この重責を完遂するには、まことに不適任を自覚し、御辞退いたしたのであるが、再三にわたる氏の熱意にほだされ、危惧の想いに駈られながらも、この貴重な記録の筆をとることに蛮勇を奮いおこした。

二月十四日(土)夜、関係者が氏のお宅に参集して、細部の分担について相談しあい、標題のうち、特に「あかざ会」の活動について執筆することになった。以下これについて禿筆を汚らせる





ことにする。

御承知のように、文化という、語義は、まことに多様性に富んでいる。一、世の中のひらけすすむこと。二、自然を純化して理想を実現せんとする人生の過程、その成果は学問・芸術・道徳・宗教ないし法律・経済等すべてこれなり。で、軽い表現をもってすれば、三、西洋かぶれなること。新しがること。などと、辞書には出ている。

文化を社会生活の中心として、精神的、物質的の両面にわたって、その全体の発達進歩を企図してゆく、それが文化主義であり、敗戦の混沌とした中に誕生を見たのが、文学を課題として、如上の目的を戦禍のすさんだ中から不死鳥のごとくよみがえらせるべく、有志で結んだのが「あかざ会」である。

昭和二十年八月十日(金)、第二次世界大戦を戦った日本は、刀折れ矢尽き、ポツダム宣言受諾を連合国側に申入れ、八月十五日、終戦の日を迎え、三十日には、厚木飛行場にマッカーサー元帥が進駐して来た。当時陸軍航空審査部、および陸軍航空整備学校などが存在した、現横田基地にも、やがてそれに伴ない、連合軍が進駐して来た。当時の福生は、第一集『ふっさっ子』の中の、「うっちゃんとおーたんと其の配下たち」(一八六頁)で、それぞれの方達が述べられているのと大差のない、まことに簡素な町であったことを記憶している。町はさしたる戦禍は受けなかった。が、進駐当初の異邦人たちには、低俗悪質な兵士が多かった。続々と復員して来る旧陸海

軍人の群、働くにも職はなく、飢餓と疾病と渦巻く中に人心はすさび果てて行こうとする世相であった。都会の灰燼から逃れて来た疎開者の急増、ガムと靴下と石鹸を代償に、貞操を売り物にする女性が急増し、駅の南口には、いわゆる赤線区域と区別された、いかがわしいバラックが急増して行った。

希望のない人々の群、この人々、特に青年の胸に明日への希望の灯をともそうと、たしかそれは昭和二十一年の夏の頃であったかと思う。十名内外の者が、本町青年団クラブ（現在小山百貨店店員寮のあるところ）に集った。現在、市の収入役橋本孝蔵氏、福生病院伝染病事務長篠崎久治氏、泉塗装工業の輿石泉氏、東京の方へ行かれてしまった館田氏夫妻、今井誉次郎、並木嶋雄先生、それに現在国分寺市の小学校長をつとめられている山崎愛治先生、永田の古奈屋旅館の娘さんであった笹本玲子さんその外、何人かの顔ぶれがあった。話の落ちゆく先は文学、演劇、音楽、講演、その他あらゆる面にわたり、この町の文化向上のために活動を幅広く展開して行こうということであった。

仙花紙と名づくる質の悪い紙で、ポツポツ薄っぺらな本なども出はじめはしたものの、紙なぞは容易に手に入らない貴重品扱いの時代であったが、それでも月に一回は機関誌を出そう、との話もまとまった。

何回かの会合の結果、誌名を、『あかざ』とすることに決定した。





あかざは、どこにでも生える雑草ではあるが、その生育と強靱性こそ、敗戦の中からたちあがる我々庶民の姿である。そのような意味をもって名づけられたと、記憶している。

当時、理想に燃えるこのあかざ会の熱気を詠いあげた小生の未完の詩がある。この拙稿を汗顔をもって揚ぐる失礼を恕し給え。

未完成（あかざ会に寄す）　昭和二十二年六月十三日

静寂（しじま）では確かに降るような星が
凍てついた大地にチカチカと
呼びかけていた
幾度となきそんな夜
大気の海底の
ひっそりした部屋で
杉と桜と松と紙屑と
異質のものが入りまじって
赤熱した情熱を燃やしあった
ダルマストーブ
何処からともなく

それを囲める位いの
　触れあうものが集り来りしは。

吹雪に鎖されたアスタポヲの寒駅で
こんな晩「手と鼻の異常に大きな」
　白髪銀髯の「善良にして恐ろしい気難し屋だった」老翁が地上82年の生活に
　最後の終止符（ピリオド）を打ったのです
（人生の道）なる校正の綴りを
手放さずに。

人生の道
それは我々が求めるたった一つの
ものであり……ひもとけば
強い感動に胸が打たれ
喜悦は渦巻きの様にこころの池を
波立たせ





無智なる過去に　　懺悔の涙が溢れる
チカチカと星の降る晩
　　レフ・トルストイ
　　レフ・トルストイ。

夜の深まりに暖炉は燃えつづける
我々の心も炎えつづけ乍ら

叡智よ　明日へ歩もう
未知なる真理の発光体を
真摯に探求するために。

私達は着実に活動を進めて行った。
国民の基本的人権や、生活の幸福、利害にとんでもない影響をおよぼすものから、再び無智にならない為に。
昭和二十二年の夏には、第一小学校の教室を借りて西多摩夏期大学を一週間にわたり開講し

た。教室は溢れるばかりの聴講生で満された。

テキストとして、岩上順一氏の『文学の眺望』が選ばれ、一、文学と社会について、二、古典遺産について、三、作家と作品について、同氏を招へいした。また音楽では関鑑子さん、野鳥研究の第一人者、中西悟堂先生の「野鳥と人間」等の歌と講演は、感銘深いものを参加者の胸深く刻みこんだ。

また人形芝居の結城孫三郎先生一統の演ずるあやつり舞台は、暗く〆切った会場に大きな感激の波を湧きたたせ、美しく生きる詩情のありがたさに人々を酔わせた。

岩上氏の「作家と作品」についてでは、宮本百合子論がとりあげられた。

つねに善意の人であり、貧しく弱き者の味方であった彼女の感性と、しかし生涯中条家のお嬢さん、という印象をはらいのけられなかった彼女の日のあたる場所の態度、それだけにこの作家からあたえられるイメージに、特に婦人参加者に与えた意義には大きなものがあった。

夏期大学のしめくくりとして、昭和二十二年九月七日最終日、私達聴講生一同は氷川の思源寮に同窓生としての友情を深め、またそれを確認しあった。

この間、細谷利男氏は道芝会を結成し、演劇を通じて文化活動を続け、前進座の川村庸雄氏等も直接間接にこの活動に参加された。

月一回発行の機関誌『あかざ』は、用紙事情の許されない中で、確実に発刊された。





それは持寄り原稿を綴ったものではあったが、内容は立派なものであったことを自負するし、またいつからか、この表紙画は私の受け持ちになってしまった観もする。

この機関誌とは別に、会の活動が活発化するに従い、その必要性から、別に月刊文化ニュースを発行しようと、その相談が昭和二十二年十一月二日の日曜日、福生中学木造のささやかな教室の一角でなされ、私の提案した「原始林」という名称が採択されたことを覚えている。

歌は、灰色に沈んだ人の心に、明るくよろこびと、光を与え、灰色の心を蘇らせるこの見地から、笹本玲子氏はピアノと合唱部門で、主として積極的な活動を行なった。

合唱の中から生れる友情と自主性、それがこの活動のもたらす意義であったことに、疑をはさむ余地がなかった。

あかざグループの定例会合は、毎月第一と第三土曜の夜と定められ、会場は第一小学校だったり、青年団クラブだったり、個人の家だったりした。

寒い季節には暖をとるために、各自が二、三本ずつの薪や板切れなどを持ち寄って、ストーブにくべあった。

会は午前二時、三時に及ぶこともあったし、そんな帰り立ち止って小用に仰ぐ星のきらめきを、今も忘れることが出来ない。

戦後の復興が、各分野において着々となされるに伴い、会のメンバーもそれぞれ新しい職を求

め、この地を去り、転任し、結婚し、多忙となり、思い出の「あかざ会」も自然解消の道を辿って行ったが、それは時勢の然らしむるところで仕方なき事と思うのである。

しかし、この会の投じた一石は、戦後における当町の文化向上に、決して無意味なものでなかったことと確信を抱くと共に、現在、市の文化連盟を中心として行なわれる文化行事の絢爛多彩さにますますその確信を深めるものである。

回想はるか二十五年、私はその後伝統五十年の歴史を持つ多摩吟社の同人に席を置き、この詩情によって彩る生活記録、俳句文学によって、きびしい文化向上への涯しなき道を歩んでいる。

この多摩吟社は、かつての町の助役斎藤西葩、同収入役川辺鶯村、同職員村野穹咆氏等を中心に、三十余名の会員をもって現在を組織し、毎月一回の定例俳句研究会、吟行、俳句をもっての七夕祭り、螢祭りへの参加を実施すると共に隣接市町村との同好の親睦を図り、併せて当市認識への小さな陰の活動を実施している。

昭和四十五年七月一日、町は待望の市へと昇格し、前進への巨歩第一歩を踏み出し、この年の文化祭は、往事を顧みまことにその盛大さには、感慨無量なるものがあった。

余舌を加え申訳けなきも、この市制施行を祝賀して、現在所属の多摩吟社では、一大俳句大会を十月十八日(日)福祉会館において挙行し、遠くは長野、神奈川、東京、埼玉、近接各市町村、九〇名の参会者を得て、盛会裡に終了した。あかざ会は自然発展的に解消したるも、その精神





は、脈々と文化向上に燃える連盟諸傘下の中に燃え続け、地域市民の幸福のために前進しつづけることであろう。

どうか無智を繰りかえさぬよう、戦後の文化活動の中からかち得た体験を尊い戒めとして、この稿の責を果したい。

蔵月のこころに今も落葉降る
どこまでも揉まれ吹かれて行く枯葉　　刈込一穂（合掌）　　（白梅短大職員）

## 青年団と演劇活動

篠崎久治

### 第五支部・娯楽大会

（文中・敬称略）

戦前、『青年団娯楽大会』という演芸会が、運動会や道路普請等とともに、青年団行事の一つであった。チャンバラ、剣舞、女声合唱、現代劇と、盛りたくさんなプログラムに、うす暗い繭買場は、蜂の巣をつっついたような騒ぎをくりかえした。そういう中で、自作自演して、かっさいを浴びたのが、橋本孝蔵である。

街道一の大親分を、オペレッタ化して、チョンマゲ姿が歌をうたったことなどは、いかにも青年らしいアイデアで、観客を喜こばせた。島田福三の大政、大野良平（故人）の小政で、自らは清水の大親分を名乗り、子分一同を引きつれての口上もしゃれていた。

やがて、支那事変の勃発は、あわただしく兵士の出動を要請した。当然のことながら、軍事劇等も登場し、催しも各支部毎にと、発展的段階を経ることになる。

出征家族慰安と銘打って行なわれた、「五人の斥候兵」「暁に祈る」等では、時局を反映して体当り演技を示した篠崎繁、森田恒男、小林利男、金子佐市等。これら青年は、その舞台のままであったであろう戦場に散って、二度と福生に帰ってくることはなかったのである。

自作自演の橋本孝蔵と、もう一人のスター、森田平治の「寿、三番叟」。〝オーサンヤ、オーサンヤ〟のかけ声で、幕あきの雰囲気をもり上げた。

町には、〝出征軍人の家〟という標札がずいぶん増えた。次々と、青年は戦場に発って行った。きびしい戦局のさ中に上演された「母子草」には、皆が泣いた！。

八王子に空襲があり、次は福生だと、噂が流れて、人々はおののいた。あたりに重苦しい気配が漂った。

そして、日本の一番長い日は、長かった戦争の終わりを告げた日だったのだ。





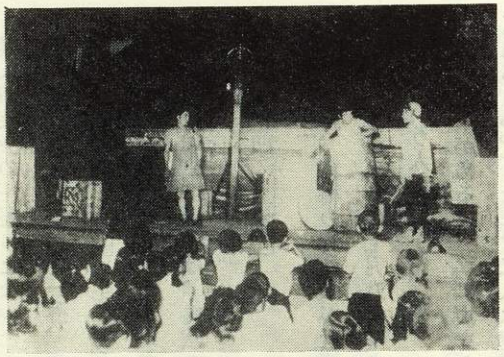
## 素人演芸会

戦争は終った！

せめて、空襲をまぬがれたのが救いと言えばいえた。「虚脱状態」に加えて、ひとしきり暑さが加わった。流言ひ語が、人々に言い知れぬ不安を醇成した。

しかし、郷土は健在だった。いっぺんに灯のついた家々に、笑いが聞こえるようになるには、かなりの曲折があったにせよ、青年は、若者は不安と希望をおりまぜて、とにかく集まった。新しい青年団の発足である。

青年主催の素人演芸は、燎原の火のごとくひろまった。浪花節の好きな日本人である。青年たちの演芸会に、娯楽に飢えていた人々は、わっととびついた。演ずる者、見物する者、我も我もと集まった。小学校の庭に、神社の境内に、畑中に舞台が仕掛けられて、若者のエネルギーはそんなところにぶちまけられていった。



演劇上演風景

素人演芸会の花盛りとなった。例を本町にとってみても、二十一年の福生第一小学校庭。橋本孝蔵作「青空市場」外、舞踊。

二十二年に同じ所で、生子国利作「人生の裏面」「鯉名の銀平」、これは、当時拝島の山小屋の庭園で開かれたコンクールに参加した。

前述の青年演芸活動は、終戦のこんとんとした世相を描いた作品であった。

## 「河童」

そんな時、青梅の青年団が近郷の青年団によびかけて、青年団演劇祭を開いた。会場は青梅の初音座。二十三年の七月八日であった。審査員は佐々木孝丸（テレビタレント）、菜川作太郎（放送作家）という人たちであった。

柚木誠一がある日、私に声をかけてきた。「ダンスホールの遠藤さんという人に、芝居を教えてもらうか。」それで二人は遠藤さんに、我々の指導を引受けてもらった。

そのころ、戦前は繭買場といって映画や菊芝居の上演場所などにされていた所が、米人などの要望もあってのことだろう、ダンスホールに変身していた。そこに、遠藤頼雄氏がいたのである。永田キング門下生として、戦前は映画俳優でもあった人である。

さすが、昔とったきねづかで、遠藤さんの演出は、堂に入ったものだった。今まで、やくざ芝





居やおどりだけで、あきたらなくなってきた多感な青年たちに強く訴えるものがあってか、皆のけいこに熱が入った。そこに、遠藤さんが、ピタッと入ってしまった感じであった。

「河童とはなんだ……」いや、そんなことはどうでもよかった。はたから見れば狂気の沙汰ともとられたろう。

演出は凝った。音楽は……ここでバイオリンがはいる……これはダンスホールから連れてこよう……。今まで、レコードの伴奏だけだった鳴物に、実際の楽士が音楽効果を入れてくれるなどで、出演者はますますはりきった。昼間働いて疲れたあとの夜の集いだ。深更になることもあった。心配して迎えにきた親たちに叱られて泣きべその女子もいた。しかし皆楽しかった。台本の中に書かれている笑う仕草や、驚きの表情を習うよりも、仕事を終えさせてけいこにかけつける青年たちのひたむきな一日の方が、どんなにドラマチックであったことだろうか。さて参加出演は、福生の「河童」をはじめ、吉野の「めぐりあい」、西多摩郡教員組合の「恋人たち」など、ほかに三田、勝沼等も参加していた。

その中で、「河童」は断然好評。そして〝優勝〟となった。皆、涙と笑いでその感激を味わった。

「河童」の時のメンバーは桜沢正一、細谷良子、篠崎久治、岸千恵子、柚木誠一、清水家寿忠、私市信雄、小林政一、佐藤勲等が主力であった。この中で、柚木誠一の〝ごん助〟が演技賞を受

け、審査員たちにその技能が注目された。

意気天をつく青年たちは、翌年の「猿」に向かって始動するのであった。

「猿（ましら）」

昭和二十四年の十一月。西多摩郡連合青年団は、その力を挙げて、郡団総合文化祭を五日市町で盛大に催した。その中の演劇コンクールは、五日市劇場であった。

特にこの「猿」は、福生、熊川の青年が一つに固まっての演技だったので、演技することを通じて、福生青年全体に好影響を与えたことだろう。

十一月二十三日、あいにくのつめたい雨の日だった。福生青年団は、これも遠藤頼雄作の「猿」でこの会場にのぞんだ。石川保、平井賢治、石川昌一、細谷利男、古谷勇、野島貞春、木村和男等の多大な協力があった。

大がかりな道具だてであったため、トラックで運んだそれらのセットが、そのままでは会場入口を通りきれず、しかたなくいくつかに解体してもちこんだものだった。満員の大観衆に気をよくし、昨年の優勝で自信をつけ、更に演技力を高めた福生の「猿」は、当然のように優勝をした。そして、〝くろ〟を演じた私が演技賞をさずかった。

この年は青梅が「息子」、二宮が「本尊」、増戸は田嶋定雄（現瑞穂三小教頭）の作品「山」を上





演したりで、それぞれに技術が高まり、審査員もその判定に苦労させられたということだ。

「猿」の出演者は、〝おじい〟森田清、その娘たちに、田光美結、奥泉由子、清水房子、そして、島崎日出男、森田武、石川治一、佐藤新平、浦野収一、細野健一、村野久代、木下久子等であった。劇のかげに文化部のリーダーであった森田幸恵などの苦心があったことを忘れてはならない。

二十五年には、青梅市青年団主催で、演劇コンクールを公民館で開いた。旧霞地区や青梅市の青年が参加した。

そのころは、福生青年団演劇部員は、各地の青年団からその演劇指導者として招かれるようになってしまった。今井（旧霞）の四月三日の天神様には、この地の青年の「猿」が上演されたり、その他の地区でも、「猿」の上演があった。こんなところで、当時の青年のなごやかな交流がみられた。

この二十五年のコンクールは、「祭りの夜」を出した勝沼青年団が優勝した。「次郎案山子」をもって参加した福生は、この時は三位であった。この「次郎案山子」は、榊原政常の作品に、私が演出をし、柚木、森田、篠崎や、小林ちか子などが出演した。

劇団〝ひこばえ〟のこと

二十五年ころから、福生や青梅の動きに刺激された羽村や秋多町二宮青年の演劇活動が活発に

なった。

羽村は、遠藤頼雄氏を招いてその指導をうけ、錦亀館を使って、それから毎年のように演劇コンクールをやった。

二宮青年は、二十六年の二宮神社の祭礼にあたり、あの境内で、真船豊作「寒鴨」を上演した。また「つゆ空」「乞食と夢」も続けて上演された。伝統ある神社の境内で、土地の青年による新劇が上演されたことに、古老たちは驚いたという。

これら西多摩各地の演劇好きの連中が、やがて話しあいの場で、「一緒にやってみようじゃないか」と言うことになって結成されたのが、劇団〝ひこばえ〟であった。

前記の羽村青年の中からは、中村浩。二宮からは別記（二宮青年と新劇参照）のような参加者があった。リーダーは遠藤頼雄氏であった。

こうして〝ひこばえ〟が誕生をした。しかしこの〝ひこばえ〟は創立公演だけで解散をしている。

創立公演の「原色の街」は、遠藤頼雄氏作であった。あらすじは、横田基地や、その地の「夜の女」たちをモデルにした、一つの米軍基地批判の内容をもった劇であった。そのようなことから、〝ひこばえ〟に対する内外の中傷めいたものもあったようだ。





〝ひこばえ〟の解散、それにつれて、コーラス、絵の会など、新しく企画され、やや進展したと思われたものもあったが、次々と消え去っていった。西多摩という保守的土地柄に、これらが何か異質と見られた面もあったようだ。演劇のリーダーであった、遠藤氏も、この世を去った。そしてまた青年活動全体の退潮ムードの中で、これら青年文化活動も、泡つぶのようにおし流されていったのである。

（福生病院伝染病院事務長）

〈特別寄稿〉

## 二宮青年と新劇

石川丈夫

（文中・敬称略）

### その発端

まず演劇を初めるようになった発端から書きましょう。去る二月二十四日、石川丈夫宅に河野専一、永田光吉、永田専一、高木茂、石川初男、（大久保亀太郎、金子正一は、急用と病気で欠席）が会合し、新劇の活動について話し合いました。その節、河野専一氏のお話によりますと、昭和初年頃は各青年団に担当部制がなく、昭和三年頃、静岡県のある青年団が、三部制を敷いて活動し

て実績を上げているということを聞いて、八王子市加住青年団が静岡まで見学に行き、その部制を持ち帰り、青年団活動に取り入れたそうです。また、加住青年団の活動状況を東秋留青年団二宮支部が見学し、もちろん、意見の交換も大いにして、非常に得るところがあって以来、事業部「共同耕作」、修養部「読書会、演芸大会」等、運動部「体位向上」等加住・静岡にならい、三部制を敷いたそうです。西多摩で最初だったとのこと。中でも修養部における演劇では、毎年四月八日に娯楽大会として、何かしら演劇を上演することが、例になったそうです。また、パンフレットの発行も手がけたそうです。新派、歌舞伎等、多種のものが上演され、当時の人達は、今年はどのようなものが出て来るのか、とたのしみにしていたそうです。以上河野氏の話はつきるところなく、私達も非常に興味深く聞き入りました。その当時の気風が、何かしらわれわれまでも続いたものでしょう。現在は以前と異なり、人それぞれに何かと忙がしく、演劇等口にする暇もなくなってしまったことを残念に思います。

二宮青年団上演種目（終戦後）

一、寒鴨、一、乞食と夢、一、原色の街（福生と合同）一、息子、一、本尊、一、縮図、一、夜番、一、水泥棒、一、乞食の歌、一、牛と娘、一、夕鶴、以上と思います。

＜「参加者」男子＞河野専一、石川孝一、永田専一、永田光吉、大久保亀太郎、大西衛、金子正一、唐沢一助、永田芳郎、中村信一、石川初男、高木茂、上野勇、岡部昭一郎（故人）、小沢利三郎、小沢幸夫、河野重義、杉田寛二、唐沢秀雄、橋本敏、菱山隆男、石川典広、河野一之、斎藤脩一、吉野茂雄、石川丈夫、唐沢健一、吉野昭二。

＜女子＞田中敏子、村野タネ子、土屋積子、河野瑛子、石川武子、村野カツ子、岸峯富久江、清水ノム、岸峯喜代子、村野アキ子、村野トミ子、以上。

立川柴崎小学校での二市三郡青年団演劇コンクールの結果。

一位「乞食と夢」　早大演劇部（八王子）

二位「寒鴨」　二宮青年団

三位「父帰る」　立川青年団

他の参加団体と上演種目は

「屋上の狂人」　国分寺青年団

「寒鴨」　奥多摩文化会

右のような結果でした。他に西秋留青年団が、なにか上演したようにも思いますが、はっきり記憶しておりません。以上。

二宮新劇同好会

## 上演のはこび

戦争で演劇活動も一時中断のやむなきに至り、戦後になり国定忠治、瞼の母、一本刀土俵入り等々、人の心に食い入るような時代物が、盛大に上演されるようになりました。私達もたのしみによく見物したものです。また私自身、戦前は舞台に立ったこともありました。

いやな軍隊生活を終り、北支より昭和二十一年四月復員した年に、河野専一氏と帝国劇場へ、ゴーリキーの『どん底』を見に参りました。非常にすばらしく、特に滝沢修、宇野重吉の演技が印象的でした。そこで帰る道々、これから青年団で何か新劇をやろうじゃないか、いや必ず取上げよう、俺も全面的に応援するから、と河野氏の熱心なアドバイスがありました。以後、氏のあの熱意がなかったら、新劇もあれほど上演されなかったことと思います。

そこで、いよいよ新劇上演のはこびになるのですが、当時の二宮青年団員は男女約一四〇名の大世帯でした。先輩の河野専一氏、団員では永田光吉、大久保亀太郎、永田専一、石川孝一、田中敏子、金子正一、唐沢一助等々、多数の協力者を得て、第一作の検討に入りました。第一作に何を上演しようか、と脚本あさりに手分けで走り廻りました。

まず一、出演人数の少ないもの、一、上演時間の適当なもの、一、衣裳や装置の簡単なもの、一、照明のたやすいもの、一、観客の心に深く印象付けるもの、と言う条件をつけました。〝どん底〟を予定しましたが、何としてもスケールが大きすぎて無理、と言うことで、残念ながら見送りになりました。右のような結果、鳩首会議を何回持ったことでしょう。そこで、真船豊の「なだれ」か「寒鴨」かと迷いましたが、右の条件にまあまあ合うと思われる「寒鴨」を取り上げることに意見が一致し、上演の準備にかかったわけです。決定後、村山知義の『現代演出論』雑誌『テアトロ』などのページをめくり、商売そっちのけで、研究と言っては大げさですが、ほとんど毎晩、二宮クラブで、十二時、一時までも同僚と話し合ったものです。脚本の一字一句の検討から、装置、衣裳、照明、演出はもちろんのこと音響効果まで、ことこまかに口角泡を飛ばして語り合ったものです。特に、舞台が冬の東北の情景でしたので、藁靴を使わなくてはならず、八方、作ってくれる人を探しましたところ、幸いにも、地元二宮に石川新七氏（現在八十歳）がおられ、立派な藁靴を作っていただきました。その出来ばえに、一同歓声を上げて大喜びしたものです。また、照明担当の永田光吉が、いろりの火にしても、プーッと吹けばパーッと赤くなり、演技者の顔を赤く映し出したり、スライダックで赤電球をしぼりましたが、あの光の印象は新しい装置の工夫でした。バックの書割は、お手のものの大久保亀太郎の独断場となり、舞台を引き立たせたことはもちろん、後々まで残しておきたいような出来ばえでした。

出演者の役と名前、スタッフ名などをスライドで紹介したりしたことも、永田光吉の発案でした。また、風は小沢幸雄に糸車のようなものを作っていただき、それに厚手のズックを取り付

け、グルグルまわして風の強弱を表現しました。これも、なかなかの出来でした。また以後は蛙の声を必要とした出し物の場合、私が築地まで出掛けて行き、赤貝のカラを探し、三組程いただいて来ましたが、確か十円払って来た記憶があります。カツラを使用する場合もありましたので、江戸川区小岩まで「オクマツかつら店」（確かそういう店名だったと思いますが）を訪れ、借用の交渉をしましたが、断わられたこともあります。

## 「寒　鴨」

ところで「寒鴨」ですが、本読み、立稽古と進み演出方法にしても、俳優から、それではやりにくい、と言う意見も出るし（と言うことは演出者が不勉強なためなのだが）、言葉にしても作者が何を言おうとしているか、じっくり吸収する必要があるので、同じセリフの「ハイ」にしても、「あっ、うんだ」にしても何度検討したものか知れません。とにかく全員演出者で、全員裏方で、熱の入った稽古が毎晩おそくまで続きました。

幸にして、「寒鴨」出演者の石川孝一、永田専一、大久保亀太郎、田中敏子のご苦労はもちろんのこと、河野専一氏他大勢のご協力で、昭和二十二年九月九日、二宮神社秋まつりに、時代劇、新舞踊と共に、その夜の最後に上演したと思います。はじめ曇っていた空は、途中で小雨になってしまいました。それでもお客さんは傘をさして、終りまで熱心に見てくれました。思っていた





通り評判は上々でした。

昭和二十三年八月三十日、町田市民衆劇場にて、二市三郡青年団大会が開かれた折、「寒鴨」を持って参加しました。その際、清香亭の御子息の斎藤脩一氏と二宮の吉野茂雄氏には非常な御努力を願い、運転手付きでトラックを一台準備していただき、小学校より教壇を借りて来るやら、大、小道具を満載して意気揚々と参加したものです。その際も絶大な反響を得ました。この時、二宮より町田へ転出され、成功された井上房次郎氏も非常に喜んで下さり、井上氏宅にて酒肴の不自由な時にもかかわらず、当日大歓待をうけました。その井上氏も今は故人となられ、当時を回想すると感無量です。

その後、立川の柴崎小学校での演劇大会に参加し、以後、秋川流域青年団演劇コンクールに「夜番」を、青梅初音座では「縮図」を、福生青年団との合同では「原色の街」を、昭和二十八年十月十六日には「水泥棒」を上演。

いろいろなものを上演して参りましたが、その中でも「夕鶴」については思い出があります（昭和二十九年十一月二十八、九日の両日二宮商工会館にて上演）。

夕鶴を上演することになった直後、「ぶどうの会」が三越劇場で開演しましたので、永田光吉、石川孝一とともに、二階正面に席をとり、脚本片手に演出、装置、衣裳、照明、その他細部にわたってメモをとり、じっくり見て来ました。

演出は千田是也、装置は千田是也の実弟の伊藤喜朔、照明は穴沢喜美男だったと思います。開幕を胸はずませて待っていました。幕が開くや、何とあかぬけした、すばらしい装置かと溜息が出たことでした。山本安英のおつうが印象的でした。桑山正一が与ひょうだったと記憶していますが、とても衣裳が良く似合いました。「夕鶴」上演に至るまでも、あらゆることで苦労を重ねて参りました。「おつう」の歩き方等々、何回となく河野専一氏の演出が細かくくり返されたことを覚えております。出演者は、村野タネ子、石川初男、上野勇、岡部昭一郎（交通事故で死亡）、子供役に、河野瑛子、村野ミツ子、小林民代、石川武子、山下和江、など今はよき家庭のお母さんになっています。子役の演出は、河野専一氏宅に五人が日参して教えていただいたものです。裏方も何時もと変らず大変でした。

鶴の羽根を一枚二枚と飛ばし、障子に映す場面があるのですが、羽根をつまんで飛ばす裏方の指先まで映ってしまったこともあります。またある時は、ブロンプターを必要としたことも一、二度ありましたが、その声が大きすぎて、客席まで聞こえてしまったり、立川で「寒鴨」を上演の際は、銃声の火薬を忘れて来てしまい、舞台裏の床板を竹べらで強く叩いてみたり、またある時は、メーキャップで、おばあさんの口のまわりのシワは縦か横か、と聞かれ、そこは職業柄、縦だよ、と言ったこともあります。「水泥棒」の土屋積子、「寒鴨」の田中敏子ら他何人かのお婆さん役の女子などに出てもらいましたが、あのきれいな顔をシワだらけに作られて、一生懸命





やってくれたものです。余談ですが、何時頃でしたか、私達新劇グループが、警察の思想調査をうけたこともありました。

まったく演劇は、あくまで心理の探究であり、一つのものを各担当部門で責任を持ち、完全に近いものにまとめて行くもの、本当に心から歓喜と言うのでしょうか、参加した者でなくては判らぬ何かがあると思います。

（都理容環境衛生同業組合教育委員）

## "ひこばえ"のころ

中村　浩

その頃は、戦後の世相の最初の変わり目だったのかも知れない。終戦から、六、七年食べることだけに追われた時代が、どうやら過ぎ去ろうとしていた頃だ。当然のように、忘れかけていた"何か"がみんなの心を動かし始めていたのだろう。

だから人々は、二十歳台も四十歳台も同じように、外へ向って何かをしゃべりかけているような雰囲気があった。

その頃、あちこちの町で青年を中心とした演劇もさかんに行なわれていて、そうした日など遠

くの方から、それこそ親戚の爺さんから子どもまでがやってきて、
「よう、○○ちゃん」
などと舞台に向って大きな声をかけたりしていた。
舞台の人も、そのほとんどが地元の人のせいか、親近感も相当なもので、ふだんの呼び名がいつのまにか舞台上の役名に変っていたりするのも珍しくない。
劇団を結成して新劇をやろう、と云う声が我々の仲間から出たのもその頃のことだ。昭和二十七年のある晩、秋多、福生、羽村の演劇好きの人が、黒ずんでそのうえ波打っているような畳を敷きつめた福生本町青年クラブに集まった。こうして劇団〝ひこばえ〟が誕生し、監督は遠藤さん、この人は惜しくも故人となられたと聞くが、大変に器用な人だったことを覚えている。
そして上演作品は、その人の作品で「原色の街」に決まった。
戦後の基地周辺の街にくり広げられた人間模様を描いたもので、純情な娘さんから始まり、チンピラ、競輪狂の親爺さん、バーのホステスと多種多様の人物が登場。恋あり、ケンカあり、果ては狂気の悲劇ありで、大変バラエティに富んだものだった。
しかし、どうも私の印象の中には、その幕あけまでのけいこ等がはっきりとしていない。あの頃のことを想い出してすぐに脳裏にうかぶのは、どちらかと言えば、そのことを通じて得た私たちの〝青春〟であったような気がする。けいこの帰りに大挙して近くの酒場へなだれ込み、ウメ





ワリを飲みながら、みんなして何となく胸を張ってみたり、帰りはほこりっぽいがたがた道を素足にチビた下駄をひっかけて、それでもせいいっぱい上を向いて歩いていた、そんな貧しいが若者らしい姿が思い出に残っている。
それやこれやのうちに公演準備もできた。今のオート多摩のところにニュー福生なる映画館があって、そこを二晩借りて、創立公演をやろうと云うことになった。
二十八年六月二十六、七日の二日間であった。早川雪洲主演の映画『山下奉文』、バレー公演を組み合わせ、創立公演「原色の街」の入場料は五十円。ガリ版ずりの招待状を配るやら、切符を売り歩くやらで、とにかく忙しい毎日が続いた。
今にして思えば、五十円とは云え、入場料を取ったりしたことに冷汗を感じるのだが、それにしても、みんな心臓強く、そしてまめまめしく動き廻ったものだと思う。
あとの幕で云うべきセリフを前に言ってしまって、それでも堂々と舞台をしあげた女優さん。新聞配達とチンピラの一人二役の難役をこなした郡の演技賞に輝く名優。ヤクザに扮した公務員氏等々。満員のお客さんを前にして——そのすべてがみんな楽しい想い出となっている。
間もなく、そして二度と公演することなく劇団〝ひこばえ〟は解散した。木枯しが胸のどこかを吹き抜けていくような、そんな寂しさを残して、あちこちの演劇グループも姿を消していった。
今でも、時々町の中で当時の人とばったり顔をあわせることがある。その話題はいつもその頃

のことである。

戦後のすさまじいまでに荒れた風潮が、いまだ残っていた時代に、そんな愉快で親切な人たちと一緒になれ、楽しい日を過せたことを私は今でも幸せに思う。そして、それもあの時代がそのような時代だったからかえってよかったのかなあ？などと考えてみたりもする。ときにワーッと今いちど旗上げをしてみたいな、などと夢のようなことを考えることもある。（福生市経済課長）

## 福生の文化連盟

山崎茂男

### 町民美術展

昭和三十二年の夏のある日のこと。町で書道教室をやっている内田満蔵氏と山崎とが、ある日教育委員会で偶然一緒になった。そこで内田氏は、橋本兵五郎教育長につぎのようなことを話していた。「近く書道展を盛大に開きたい。ついては教育委員会に物心両面の後援を願いたい」というようなことであった。ちょうどそのころ絵の会の雑用係をしていた山崎が口をはさんだ。





「絵の会も同じですよ。同じことを願い出ようと思っていた」そこで三者は、町の他の文化団体の動きも含め、他市町の文化展のことなどもひきあいに出して話しあったが、改めてこのことで、本格的な話しあいをもつことにした。

当時の世相は、日本の敗戦の日から十年余を経て、一時の混迷の様相から徐々に平静をとりもどしつつあった。その生活の落ち着きの中に、人々は身のまわりの文化向上をしだいに求めていた。そして福生町の中にも、あちこちに趣味グループなどの誕生が目立ちつつあった。

三十二年十月三十日

次のような人たちで打ち合わせをした。

橋本教育長、町田主事、小林国之助（一小教諭）・内田満蔵各氏と山崎茂男。

各部門ごとに、後援だの賞品だのというより、教育委員会主催の町民美術展を開くことを、教育長が提案。同席者は全員賛成。

全体で一万八千円の予算があるとのこと。

十一月十九日

一小で打ち合わせ。

分会場をつくり芸能部門も、という案もあったが、会場難のため、美術展だけにする。謡曲の

人なども、出場を目ざしていたのに、計画中止で気の毒。

十一月二十日

第一回福生町民美術展ポスター、五十枚製作。

十一月二十二日

会場の準備。絵、写真、習字など作品多数。回覧板で公募したため、自慢の盆栽なども搬入された。中学校の五十嵐先生も腕まくりでかざりつけに協力。

十一月二十三日

いよいよ第一回福生町民美術展開幕。客足好調。

一小の秋の大展覧会場の片隅を借用して開いたもの。一小展の客がそのまま入場者となる。

十一月二十四日

朝からあとかたづけ。出品者の絵など返納にあるく。山崎製麺所より借用の三輪車にて運ぶ途中、石川孝明氏より借用の油絵、画面に傷をつけてしまう。教育長に同道願い、お詫びを申しあげる。大失敗である。

## 福生美術協会発足

福生でも、本格的な絵画展の場をもちたい、と希望する町在住の画家で、福生美術協会を発足





させる。

三十三年一月二十五日

次の各氏が山崎の家に集合。発会とする。五十嵐祥晃、小貫政之助、坂忠男、鈴木章、田島昌、堀英、米津豊也。

協会の会長に、美術ファンである医師、石川孝明氏をお願いした。雑役は山崎。

この日、さっそくに協会の発表会展の打合わせをする。五月十日より十二日まで、牛浜の婦人生活会館にて行なうこととなった。福生でこのような絵の展覧会が行なわれたのはこれがはじめてのことであろう。

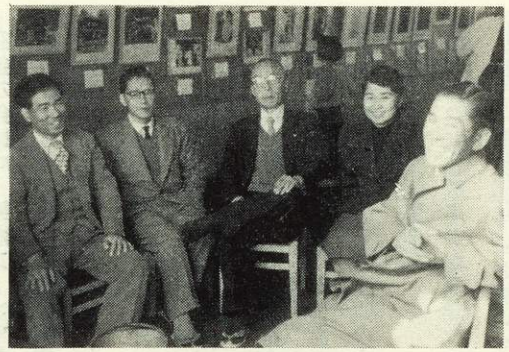
## 福生町文化連盟誕生

第一回福生町民美術展の反省会を、三十二年暮に福生珠算学校で開いた。横田教育委員長の司会で関係者十数人で賑やかに話しあった。いろいろ検討の結果、教育委員会が主催するよりも、諸団体が話しあい、その連盟の合同展のような形での開催がよろしい、との結論が生まれた。

昭和三十三年二月八日

この日、有志数名が珠算学校に集い、この連盟の構想と、会長を、文学博士で日大教授の鮎沢信太郎氏（熊川在住）にお願いすることを話しあう。

二月二十一日
文化連盟結成準備懇談会。
コーラス部のみ欠席、他団体は全部出席。具体的な話に入り、橋本教育長には、町の協力態勢などの質問も出た。
四月二日
準備委員会。会則をつくる。
四月二十五日
役員の下ばなし。
会長に鮎沢信太郎、副会長につりクラブの水谷清一と俳句霧の音の来住野元一、会計に、書の内田満蔵の各氏。庶務には、中学教諭の木村東一郎氏と、山崎茂男ということを話しあう。鮎沢会長候補には事前の交渉を進める。


第1回総合文化展会場にて

九月二日　発会準備会。
十月六日　発会式を福生珠算学校にて行なう。予定した人員がほとんど出揃った。この日、ただちに行なわれる、文化連盟主催の第二回町民文化祭の話もすすめられた。役員選出、規約等もいっさい承認された。





十月十七日
文化祭打ち合わせ開催、珠算学校にて。
十月二十日
実績もないことでしかたがないが、町よりの文化連盟への補助金は少ない。やむを得ず、有志宅へ協賛費のお願いに歩くことにした。青梅線を境に、向うは水谷氏ほか、こちらは山中正雄氏と山崎で歩く。このような寄付金もらいに対し、何か胸の中がもやもやする。
十月二十六日
町内のお花の先生たちが大同団結して、福生町華道連盟が結成された。その形のまま文化連盟にただちに加盟となった。
十一月八日
有志方よりのご好意の協賛金、全額で二万五千円を頂戴した。
十一月二十三日
昨年の町民展の会場であった一小は、PTAのバザーで使用されたため、文化祭での借用は不可能となった。それで、一小前の青年クラブを美術展会場に借用した。ここには、書道展、釣展、編物展、人形展も参加をした。そして、第二回文化祭が開かれた。

三十四年十一月三日

第三回福生町文化祭開催

参加団体は次の通りであった。

美術展会場（一小講堂）　（　）内は代表者氏名

絵でも果光会　（五十嵐祥晃）

福生美術会　（米津豊也）

書道展　（内田満蔵）

つりクラブ展　（水谷清一）

写真展　（秋山三雄）

編物・和裁・手芸展　（堂田きよ子・榊マツ・村野久子）

秋盛会菊花展　（野村亀之助）

駅前広場にて

福生華道会展　（麻生昭月）

志茂・睦会館

福生茶友会お茶会　（麻生昭月）

同会場





西川流・菊川流合同舞踊発表会　（野村三代）

信用金庫ホール

謡曲　（熊谷　彦）

福生珠算学校

金光舞踊発表会　（金光ハツ）

民謡踊り研究会　（水谷貞子）

ニュー福生

俳句（霧の音大会）　（来住野元一）

志茂・睦会館

以上

三十五年の町制二十周年記念文化祭には、以上の会のほかに、

人形展　（萩野　紫）

おはやし同好会　（中福生有志）

御詠歌・小唄会　（田村キヨ）

美術展　（青年団文化部）

多摩吟社、俳句大会　（斎藤西葩）
多摩自然石趣味の会　（児島信一）
文化講演会
等も加わった。

## 鮎沢会長の引退

三十七年三月

文化連盟の発足時よりの鮎沢会長が、一身上の事情で引退されることになった。この町ではじめてのこの種の団体を、どうにか組織らしいものに育成された鮎沢会長のご苦労は、大変なものであった。どうやら軌道にのってもう心配はないから、ということで、固い辞意表明のため、連盟としては、残念ながら次期会長を選考した。

この時、来住野元一副会長も辞任された。

連盟の所属団体も多くなり、活動も広範になり、それだけに内外ともに困難な事態も予想される時点でもある、ということで、町議会議員の米泉薫氏（写真クラブ）に、二代目会長をお願いすることになった。

昭和三十七年四月の総会で、次の新役員が選出された。





会　長　米泉薫
副会長　水谷清一、児島信一の各氏。

## 各種団体で賑わう

第七回展（三十八年）より、文化祭の花であった美術展が消えた。とりまとめ役がいなくなってのこと。

第九回展（四十年）より、次の会が新たに加わった。

職員美術展（役場職員、青年婦人部）
文化財展示会（福生町文化財調査会）
盆栽展示会
英語劇　（青年学級英会話）
三曲合同演奏会（福生三曲協会）
コーラス発表会（あすなろコーラス会）

町の補助金も、第三回展は町制二十周年の年でもあって、十万円が出た。その翌年からは五万

円となり、しばらく続いたが、町が地財法の適用を受けてからは、その非常事態のため一時、補助金が中止された。

四十五年は市制祝賀の年でもあり、また役員の骨折りもあって、相当の額が市から文化祭のために出されたと聞いている。

## 米泉会長の勇退

なお、四十四年になり、三十七年以来会長の任にあって、大役を果たされてきた米泉薫氏が病弱のため辞任された。

文化連盟にとって、数々の難問をかかえたこの時期の会長として、人の和に腐心され、献身的な努力を尽くされた七年間であった。ここで、その米泉会長と共に功労者であった児島信一副会長も、引退を表明された。

四十四年の総会において、次の新役員が選ばれ、会長には、三十二年以来、町の文化向上を叫び続けてきた副会長の水谷清一氏が就任した。

会長　水谷清一

副会長　森田潤三、斎藤西葩、吉野良夫

会計　山中正雄





会計監査　松永栄、石川繁治の各氏。

昭和四十五年の市制施行祝賀の意味もこめた第十四回文化祭の催しものは、次のようであった。

華道展、絵画展、文化財展（福生の埋蔵文化財）、菊花展、盆栽展、俳句展、人形展、編物展、釣展及び釣映画。

日本舞踊、バレー、茶道、民謡踊、詩吟、三曲演奏会。

講演　胡蘭成先生、塩野半十郎先生

この時には、市、そして教育委員会も共催団体となって、文化祭にとりくんだ。

中心日の文化の日などは、各会場は相当の人出で賑わった。いかにも、福生町文化連盟十数年の結実が、新福生市制に花を添えたかの感があった文化祭であった。

## 庶務係の見た文化連盟

文化連盟は、町内の関係諸団体が話しあい、おたがいの力で、この連盟を運営していくものである。だから、その運営資金についても、お互いの会でもちよった会費によって運営し、町の補助金をあてにするようなことを考えなくてよい。あくまでも自主性を重んじた団体でいくべきだ、と初代の鮎沢会長は力説して、文化連盟がスタートした。

しかし、はじめの話しあいのあと、遂次入会してくる諸団体の考え方は、文化連盟に入れば、我々が苦労しなくても役場からの補助金が出るし、文化祭の時などその準備、運営について相当の援助をしてくれるのだろう、というような大きな期待を抱いていたグループが多かったようだ。だが、連盟本部の運営組織自体は、それにこたえるには不相応の面が多かったのではあるまいか。そこで、いざ行事となれば、ほとんどすべて自分たちの力でやることに変りはないようであった。

ついては、これら加盟団体の意向に少しでも近ずくよう、鮎沢会長が役場に働きかけ、三十四年度から年額二万円の補助金を得るようにした。だが、二万円では文化祭の際の会場費とポスターの印刷費でいっぱいであった。連盟の資金は、各会よりの会費を徴収してそれで運営されたが、役員等の活動については、役員が自腹をきったものであった。

文化祭にあたり、本部としては、この町のものを最高に示したいという意欲をもっていた。コーラスのグループがある。写真のグループもある。先方は文化祭など希望していませんということでも、ぜひ町の文化向上のために参加してくださいと申し入れる。そこで文化祭に参加してみたら、別にお礼が欲しいわけではないが、会場のかかりの一部をその人たちも負担しなければ、その文化祭の運営がなりたたない。文化連盟からの補助金はこの会に五百円です、となると、頼まれて協力したのになんですか、ということにもなってしまう。





一方、町の一部には、文化連盟の中には営業のグループもあるのに、それに補助金を出しているのはおかしい、という意見もあったようだ。だが、出したにしても最高の時で一団体に年に千円ぐらい。係となってみると、こうしたそれぞれのグループが町の行事に参加して、一つの地方文化をつくっていくことの意義を考えてもらいたい、という感じであった。

文化祭運営の困難さは、やはり都市化にともなう人の心の問題が大きい。

絵を飾ろうとする。出品者の名前を見て、主催者側も客も、それがどこの誰れそれとわかるうちはことは簡単であった。が、展示作品がふえ内容がもりあがるにつれて、会の運営は困難さを増した。会場内の不平、展覧会へのまわりからの非協力という形をあらわにする。どうすべきだ、こうしようという意見は多く出るが、いざ行動の段になると「それは別ですよ、役員がやりなさい」などと逃げる。これは、美術展の人々がそうだったというのではなくて、文化連盟全般のことで、世話係をしているうちに、このような問題が一～二あった、というたとえである。

市民文化祭という以上は、ひろく一般市民が参加できる形のものであるべきだ、という意見もある。かつての福生ではそれもできた。が、それを実行していくということは、変わりゆく町の様相からも、相当の困難にたち向っていく覚悟がなければ、と思う。

## 今後の問題点

「文化とは、『人間が、その精神と肉体とをはたらかせて、生活をゆたかにするように作る努力とその所産。科学、芸術、宗教、道徳など』辞書にはこう記してある。これを思う時、我々のやっている福生の文化活動とは、一体何か？……と再考せざるを得ない。

今後は青少年も含めた、町民すべてを主軸にした文化活動になるよう、福生町文化連盟の推進に一役担って行きたい」と四十四年の総会時、水谷会長は述べた。

ともかく住民の自主活動で、一度もその灯をたやすことなく、れっきとした文化祭が十四回も続けられて来たということは、真に素晴しい記録である。そしてそれ自体が、福生の細々とした文化の灯を守り育ててきた人々の、大きな文化活動であったといえる。

今後、この十四年の貴い記録を一層もりたてていくために、文化連盟の人たちは、その自主性を保ち続ける努力を積み重ねていくとともに、自治体からの市民活動への理解ある物心両面からの援助がなされ、その両輪が円滑にまわり続けていくことをのぞんでいると思う。

なお、新しい福生市により、新しい文化活動の高まりを考えるならば、文化連盟の指導層に、その次の代を引き受けていくべき若人の面々の積極的参加が欲しい気がする。





## コーラスグループ第一号

須賀　令子

たしか終戦まもない昭和二十二年四月頃であったと思う。

そのころ福生小学校は、まだ木造校舎だったが、玄関のすぐ左の教室（十五教室中、そこだけが電気のつく良い教室とされていたのだが）の天井から一本のコードでつるされた裸電球の下で、寒々とした会合が開かれた。これが福生コーラスの会として第一回の集いを催した最初であった。

この話し合いの席でのこと、同級生とは良いもので、旧姓笹本裕子さんと私が発起人だったのだが、やはり同級生の八巻さん、伊東さんをはじめ、知人十五、六名が集まり、お互いにひさびさの顔合せをなつかしんだ。そして、毎週土曜日午後六時よりコーラスの練習を始めようというように話がまとまった。

講師は、国立音楽大学の先生である旗野先生。この先生は、私の友人の勤務先である立川病院でコーラスを指導しておられて、私もそのコーラスに籍をおいていた関係上、お忙しいところ、無理にお願いして来ていただいた。まだ二十五、六歳の眼鏡をかけた線の細い先生であった。

曲目は、「花」とか「希望のささやき」とか、女学校時代に習った懐しい歌を中心に、大野良

子さん、伊東豊子さん、島崎茂子さん、笹本裕子さん、村尾千代子さん、岩田トシ子さんその他、みなさんと、広い講堂の片隅のピアノを囲んで歌った。まだ娯楽の少ない時代であったので、皆熱心に集まって、楽しく歌った。

ところが、先生はお体が弱かったためか、お忙しいせいか、休まれることが多くなった。せっかく皆さんが集まっても、先生が来られなくては、広い講堂で寒さに震えながら雑談をするに過ぎず、だんだんと人数も少なくなって行った。裕子さんと私は、間に立ち、はらはらしながら先生が休まれぬよう、いろいろ気をくばり、物資の無かった時代なので、手作りのおまんじゅう等を持って行っては、お土産として先生に、持ち帰っていただいたものだった。

そのうちに、とうとう先生がお体を悪くなさってしまい、来られなくなったので、コーラスもしかたなく解散しないわけには行かなくなってしまった。

その時程、自分がピアノを弾けないみじめさをひしひしと感じ、泣けて泣けてならなかったことはなかった。

時代がめぐり、良き妻、良き母となり、きっとあの頃を思い出し、お子さんの伴奏で歌を口ずさんでいるであろう皆さんの姿を思い出しながら、二十二年前、その方々が結婚祝として私に贈って下さった花器に、静かに花を活ける今日この頃の私です。

（主婦・旧姓笹本）





## 民謡おどりのあやめ会

水谷　貞子

日本の敗戦による社会の混乱から、若い人はすぐに、たくましく立ち直ってしまいました。しかし、家庭もちの人たちが、生活に何かゆとりを感じだしたのは、それからしばらくたってからのことです。

その敗戦の日から数年たったころ、長沢の森田七郎さんが「長沢音頭」を作詞しました。曲は「秩父音頭」を借用したものです。

福生長沢　下上（しもかみ）そろうて
舞うもうれしや　盆踊り

堂坂下から堀端までを
昔変わらぬ　沢の水

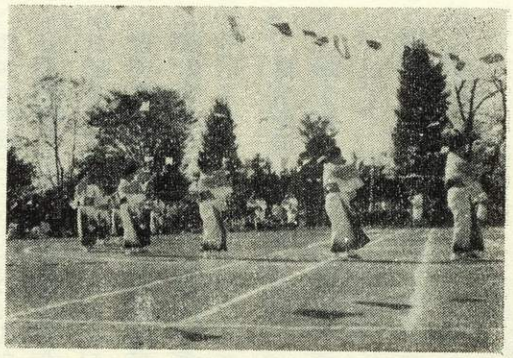
（以下省略）

その「長沢音頭」にうかれて、長沢のご婦人たちが暗い世相を忘れようとするかのように踊りだしました。

福生の町にも文化連盟が発足したのは三十三年でしたが、それに刺激されてか、いままでは別々に踊っていた人たちが一つにまとまって、文化連盟に加盟をいたしました。会の名前を、「民謡おどり研究会」とし、二百名からの人たちが参加しました。

その中心には、長沢の清水スミ、熊川の高橋ユキ、斎藤静子というような人たちがいて、私がその代表者ということになりました。

今までは仲間でなんとなしに楽しんでいた会だったのに、文化祭などの晴れの場に、はずかしくなく踊りたいものと、東京都民謡指導員の沖倉先生を指導者に迎えて、皆さんそれは熱心におけいこをされました。そして、スマートな踊りの会ということで人々の目にもとまり、町の七夕まつりなどにも出演することになりました。自らも、敬老大会を開き、また老人ホームの慰問などと出かけて多忙となりました。



体育祭にて民謡おどり





まもなく会の名称を〝あやめ会〟と変えました。

会が盛んとなるにつれ会員の数もふえてきました。また遠くからけいこにこられる人たちのつごうなどもあって、熊川の人たち、またその他の地域のグループにと、わかれていって、民謡会がたくさんになっていきました。

現在、福生市の中には次のようなグループがあり、文化連盟に加盟してそれぞれに活動しております。

| （会　名） | （責任者） |
|---|---|
| 花月会 | 清水スミ |
| 熊牛民謡会 | 阿部チエ子 |
| 熊川美州会 | 高橋ユキ |
| 志茂睦民謡会 | 岡野正雄 |
| 福扇会 | 橋本雄一 |
| 中央民謡会 | 中村糸子 |
| 花扇会 | 木村貞子 |
| 福生民謡研究会 | 大谷光利 |
| 加美平好舞会 | 藤島庸子 |

三弦会　川杉あぐり
あやめ会　水谷貞子
（四十六年三月現在）

民謡おどりは、若い人から老人まで、また男性もまじえて、実に賑やかなものです。毎日の生活のさまざまも忘れられ、なにより健康のためにいいのです。腰もまがりません。

あやめ会は現在会員は五十名ほどです。会長には私があてられ、副会長に細谷タミ子、小島君子です。

家の中で考えごとなどある時は、私たちの民謡踊りの仲間になってみてください。笑って踊って、人生が楽しくなることうけあいです。

## 福生に誕生した俳誌『霧の音』

来住野元一

(一)

蕉風俳諧の理念とされている芭蕉の語に、不易流行の言葉がある。この言葉の意味内容については諸説があり、早計に論断することは出来ないと思うが、芭蕉の作品なり生活なりから察せら





れることは、旅をもって生活とし、旅をもって作品の場としたことから考えて、旅の実践の中に天地自然の絶ゆることのない変化それ自体を不易の実相と観じ、己れの芸術（作品）の中においても、自然の変化にひとしくその真ただ中において詩韻を捉え、更にその変化に同じて不断の流行をかさねてゆくことを詩の本質としたものと思われる。

一説にある句の姿句体の別をもって不易流行を説いた、つまり、内容や表現の上に新奇な点がなく、しかも新古を超越した落ちつきをもつものが不易で、その時々の好みにしたがって斬新さを発揮したものが流行とされる説。これもまた頷づけないこともなく、むしろこの説の方が一般性を持つものであるかも知れない。しかし私は前説を重く、後説は頷づくにとどめて考えていきたい。

冒頭になぜこのようなことを書かなければならなかったと言うと以下(二)(三)へと必然的な関連とその作品への理解を持って貰うためである。

(二)

昭和初期における新興俳句から現代俳句に移行し更に『霧の音』史を書く都合上からも現代俳句を戦前戦後と分けて考えて見なければならないのであるが、ただ『霧の音』は戦後昭和二十六年の誕生であるので、戦後の現代俳句にのみ簡単にふれておくこととする。ただ歴史的社会史的変化から言えば、戦前戦後が一つの区切りになるわけであるが、これと平行して文芸史的な区切

りを見るとすれば、昭和六年に水原秋桜子氏の発表された「自然の真と文芸上の真」と題した反ホトトギスへの宣言と、昭和二十一年十一月『世界』所載の桑原武夫による「第二芸術論」をあげることが出来る。ともに文学上の理論としてさほど高度なものではないと評価はされているが、この二論が新興俳句、現代俳句の源泉となる刺激であり、百花絢爛と言えば言い過ぎかも知れぬが、より高度の俳句、より多くの作家並に作品愛好者を生んだことは事実である。

戦後食糧と共に活字に飢えていた私たちに数多くの俳句誌が誕生していった。そしてそれらの中から私の選んだのは中村草田男による『万緑』であった。この『万緑』は当時水原秋桜子、山口誓子等の芸術主義に対する草田男の「精神主義」とも言えるものであろう。『万緑』で学ぶこと二年余にして私は加藤楸邨の『寒雷』に移った。

秋桜子すでに大成の境地にあり、草田男また独自の世界に身を置き、波郷すでに亡く、人間探究派と言われ、あくなき精進をつづける楸邨は多彩にして多才の弟子と共にその実作に論説に俳壇第一人者となって活躍を続けている。

このような私の身辺の中に『霧の音』が生れ、現在の『霧の音』があるわけである。

## (三)

もうそろそろ本論に入らなければならない。私が現在の福生に永住の居を構えたのは終戦間もない昭和二十一年。そして二十二年には勤めも福生第一小学校に移る。当時の福生は進駐軍の基





地と娼婦と娼窟と闇物資集散の町でもあった。まるで文芸には縁のない様相を呈していた。しかし中央にはすでに『寒雪』『万録』『暖流』『春灯』と復刊され、沢木欣一らの『風』も創刊され「現代俳句協会」も二十二年十一月には創設されていた。

俳句の機運は徐々にではあるが東から近ずいていた。そして私の作句意欲もふくらんではしぼみ、しぼんではふくらみ折々の句を手帳に記すようになった。たまたまこの時に戦前東京時代の『馬酔木』をはじめとしたいくつかの俳句誌で作品と名前だけの知人であった、今は故人となった沢井白流子氏や、また現在『霧の音』の古参同人森田蘇丘氏の兄森田秋峰子氏や、多摩吟社の斎藤西葩氏などの発起により『臥丘歓迎俳句会』が開催された。たしか会場は森田殷史さんのお宅で三十人くらいの同好者が集まって下さったように記憶している。このことが俳句に再度心を入れる直接の動機でもあり、なお非礼をもかえり見ず言わせて貰えば、このままでは西多摩の俳句は軌道を変えた列車に乗り換えなければならない、でないと置き去りにされたまま消滅してしまうのではないかとも感じたのであった。

そしてこれらの人達と一、二年真剣に取組んで作句した。しかし疲れることが先で私の願う方向転換は出来そうもなかった。そこで私は新人、つまり作句経歴を持たぬ人から始める外ないと考えた。これがPTA成人教育部の俳句サークルの発足であり、それが『霧の音』誕生の母体であり『霧の音誌』発刊につながっていった。時に昭和二十六年六月。

## 四

『霧の音』第一号として出たのが二十六年十一月、奥多摩吟行の作品が載せられ、謄写版四頁。ちなみにその作品と作家を記せば

染糸の乾く日ざしや柚子熟るる　斎藤西葩
ひよ啼きて杉秀の群を風波す　加藤千坂
ホームより見上ぐる崖のつぶら柿　平沢美江子
谷川の巌かむ音や風寒し　松永青湖
茎二つ索莫とあり柿実る　刈込一穂
山肌をするどき紅葉おおいけり　室谷直子
製材の息吹き鳴瀬の合間ぬい　平沢茶坊
峡の風葉うらを返えし木の葉落つ　尾花文枝
落葉踏みのぼる小径や陽のかげり　野田恭子
鉄橋の橋台白く紅葉濃し　川辺鶯村
秋深し杉山だけの濃きみどり　島野ことみ
谷深く冬日は山の嶺にとまる　来住野臥丘

以上十二名参加、内八名が新人。現在『霧の音』に残るもの、私の外同人として松永青湖、室





谷直子（梨花）氏二名のみ。

三号より臥丘選秀逸のみ載る。作家二十一名、現在に続く会員、青湖、梨花、津曲女、蘇丘。

七号より『玉石半頁集』を隔号（当時月二回発行）に掲載、選評並びに句作指導に臥丘当る。

昭和二十八年、臥丘青梅一小へ転任、『霧の音』特集号出る。十四頁。

同年六月『霧の音』二周年記念号として二十頁。ちなみにその内容を記すと、「霧の音二周年を迎えて」臥丘、「霧の音作品並に選評」臥丘、「吟行作評論」千坂・青湖、「雄蜂」茶坊、「霧の音いろは歌留多」「群雀俳談」突拍子、「霧の音二周年を迎えて」美雪、「四谷見付附近」千坂、等であり、巻頭文「霧の音二周年を迎えて」を見ると発会頭初の目的が徐々に軌道に乗って来たことがわかる。

この記念号（第四十五号）の巻尾に会員名簿が載っている。それによると、八巻好江（美沙緒）、大野米子（由利）、持田改三（花朝）、榊マツ、片山四郎、田村好子、関根正子、田村久江、伊賀上朝子、三井田秀子（井筒）、来住野臥丘、来住野きん子（津曲女）、磯村重子（渚）、森田要三郎（無風）、堂田あき子、山本五三五、高山君子（早苗）、藤井鶴（春玉）、高久定吉、市川由起子（潤）、伊藤裕之、小林弥生、小泉妙子、木崎やす子、久下みや、杉美津子（明石）、木村とよ、中丸富美、榎本みつ、村尾春子（峨嵯野）、志村豊子、平沢政雄（茶坊）、平沢美江子（美雪）、室谷直子（梨花）、橋本増子、丸田ツネ子、堅物八重子、小林芙妙子、岩森一（梅路）、古谷昌夫、金子峰

子、細渕初枝、高杉四女子、村野又四郎（穹咆）、松永栄（青湖）、山下ヨシノ、工藤さだ、今野つよ、加藤守美（千坂）、加藤寿子、尾花文枝、神宮寺一（牧人）、神宮寺美子（青女）、和田雪子、米津床子、佐藤婦美子、森田貞三（蘇丘）、加藤照代、青鹿頼三、中野いね子、田中みつ子、清水喜美子、三浦みよ江（花汀）、津田千代子、川辺堅一（鶯村）、柳沢かず、斉藤吉太郎（西葩）、野島カヨ（華村）、山口美智子、森田秋峯子、岡野梨杏、小林まさえ、藤原如水、野田恭子、深沢トヨ（以上七拾六名）

この頃より福生以外の地区より会員となる者漸増。

翌月の巻頭言に、――現代生活の持つ郷愁――の見出しでこんなことが書いてある。戦後八年を経た、当時の感慨を覗くよすがにもなるかと、全文を記す。

いまさらカール・ブッセの詩「山のあなた」を思い出すまでもなく現代生活のもつ混乱と苦悩とは抒情を壊し美を失ってしまった。

我々は無味乾燥な日々の中に現代に反発するものを感じ郷愁をもっている。主義とか主張とか言わなくとも今日の生活の中から他人のうけうりでない、人からの借り物でない自分自身の言葉を持ちたいと考える。

ここに俳句があるのだ。

そしてかく考えて作られた俳句は下手でも、その人間像をなし近代文明の中に呼吸する芸術





につながるのである。

生活を基礎として成り立つ芸術は自分をはぐくみ、その精神を高くすることによって独自の個性を創る。生きる喜びをここに生じ、生活を情操的に意義づける。

ともすれば自分を失っていこうとする時、知性の黄昏に灯を入れよう。我々の抵抗を光彩あるものとしよう。

枇杷豪華働く者の夜の卓に　　臥丘

とある。今読むと何か借り物の文章のようでもあり、冷汗の出る思いでもあるが、新会員に贈る言葉と言う意味で書いたようであったが、実はこの三ケ月程前まで教員組合の執行委員長というような柄にもない役に二年間程ついていたので、今考えると自分に言っている言葉のようでもある。

なおこの年にもう一つ記録にとどめて置きたいことがある。当時の福生新聞の主催で「西多摩親睦俳句大会」と称する会が七月十九日中福生会館で開催され、西多摩全域から八十余名の人が集まった。時の選者は長沢永楽、落合一竿子、斎藤西葩、森田秋峰子、それに福生新聞俳句欄の選を担当していた臥丘であった。この頃より霧の音は排他的であると言うような声が出はじめていただけに有意義な会であったと思うし、またその後このような各派全域合同の会の現在に至るまでないことが残念に思われる。いまここで排他的と言う言葉が出たが、決して霧の音としては

そのような意識はなく、ただ数名を除く外まったく地域俳壇的には名の通らない新人ばかりであり、その作品もまた、異っていたためでもあろうが、ただこの言葉が長く後を曳いていたことは事実であり、その功罪もまたあった。――既成俳人に嫌遠されたこと、反対に俳句のもつ文学性にひかれる若い新人を得た――こと等である。

第四巻五十六号に、松本たかし『石魂』出版並に読売文学賞受賞祝賀会に出席しての記事が四頁にわたって書かれてある。臥丘招きをうけて出席。著名俳人文学者多く、この頃より中央俳壇とのつながりを持つようになる。

二十九年十月より「新生文化社」に印刷依頼、二十六頁、一部三十円、三年間にわたる謄写刷俳誌と決別。内容目次「霧笛抄」「古句と現代俳句」臥丘、「伝説の子の権現由来記」村中元治、「臨海十日」作品二十三句、臥丘、「鵜原紀行」杉明石、「晩夏の鵜原行」作品、「研究会作品紹介」茶坊、「子の権現吟行作品」。

この日昭和二十九年九月二十六日、台風により洞爺丸の沈みし日なり。出発時からすでに風強く、時折の聚雨激しき中を出発、子の権現頂上にて歩行不能の台風となる。午後二時過ぎ雨止む。この時の作品。

金色新色瞑目吾れも野分きく　千坂
白飯豊か伽藍に赫き秋曇　〃





山芙蓉その下枝も乳房の辺　美雪
つまづけば靴先につき葛の花　〃
さるすべり畑真中の墓六基　蘇丘
竹目鏡武甲を時化の雲去来　〃
雲くらく朴の葉落つを見て遅る　茶坊
野分中よろばい渡る降魔橋　〃
銭貯まれと御仏に祈る堂の秋　紫苑
風真向野のりんどうを踏み進む　明石
曼珠沙華折り捨つ川も茜なす　〃
野分焼鋭くにらむ露座仁王　梅路
一隅の秋の炉に人たむろして　早苗
颱風過ぎ山路は岩も露にす　〃
姫紫苑の大鉢に土間野臭満つ　青湖
霧立仁王天狗が落す青杉実　臥丘
子栗鼠拾う霧立仁王の足立つ地　〃

昭和三十年一号（通巻六十六号）霧の音集投句者五十一名、内現在まで作句活動を続けている人、

杉明石、来住野津曲女、森田蘇丘、室谷梨花、村尾嵯峨野等。

翌三十一年七月霧の音五周年記念号発行並に第三句集刊行。

この年の六月十日青梅市市民会館で五周年記念俳句大会を開催。投句者百四十二名出席者百三十余名盛会。当日の成績合点第一位杉明石、高点句賞桧山明日香、霧の音賞安藤奈加之の諸氏。

臥丘特選句

山毛欅の樹の追憶を天にひるがえす　花篝

灯せば指も真珠も白し梅雨の真夜　嵯峨野

おびたゞしき水藻五月の沼曇る　未萌

中間報告梅雨に濡れ来て若き闘士　奈加之

麦の穂が竝天の叡智輝かす　北洋

週末を家に娘となり豌豆むく　美代

なお現在まで『霧の音』作家として活躍している者三十四名、河村四響氏紫水の名もって始めて出席、その直後会員となる。

昭和三十二年頃より会員多地区にわたり増加特に青梅地区多きため、毎月の俳句例会を青梅公民館で行なう。

各地に支部誕生。青年部（蜂座）が田辺吐樹男氏の主唱により発足。この年加藤楸邨先生を招





く、その時の講演「生の実証としての俳句」を三回にわたり誌上に連載。なおその折の楸邨先生選句抄録

秀逸

杣の子の今朝かゞやかに色手袋　臥丘

鋸提げて伐るべき冬木の胴たたく　千坂

櫃のたがみがくや胼の指反らし　葉月

山葵萌黄に岩鳴らし走す雪解水　四響

冬の月日光街道天に入る　祐峰

二夕日臥せば寒の盥が水漏りす　津曲女

教師よりも厚き胸もち夜学生　玲爾

湯を強く捨て元日の汽関車発つ　彩志

何の木か瘤は逞し卒業期　宵帆

レントゲン写真無影となる

胸に顔に風花躍らせ今日全快　嵯峨野

春めくや濯ぐ泡立ちおもしろし　鞆絵

特選

雪降るや空腹が鳴る仕上工　大聖子

春蘭にかゞむ手の荒れ唇に寄す　蓉玉

遠くとゞろく追儺の花火雪降り出す　臥丘

五周年以後数年が『霧の音』として第一期の隆盛期であり、臥丘選の『霧の音』集も投稿者百名を下らず、『霧の音』誌も活版印刷となり、三十頁前後中央俳壇との交流盛んとなる。なお知名結社へ会員を送り当人の勉強並に霧の音充実のための基礎造りに着手。『寒雷』（加藤楸邨主宰）へ、四響、正光、未萌、嵯峨野、禾茎、彩志等々、『風』（沢木欣一主宰）へ吐樹男、真紀朗、『河』（角川源義主宰）へ蘇丘、明石等それぞれ年余にして各結社の有力作者となる。四響、禾茎は共に寒雷年間最優秀賞をとる。『寒雷』同人和知喜八主宰の『響炎』同人に四響、正光推され、禾茎はまた古沢太穂主宰の『道標』同人となる。蘇丘は『河』の同人へ、真紀朗は『風』の同人、吐樹男また『風』の巻頭作家となる。

このように各作家それぞれ俳壇的に成長し著名作家となっていった。

昭和三十六年には『霧の音』十周年記念大会を催し、加藤楸邨をはじめ角川源義、沢井欣一、加藤千世子、原田種茅、和知喜八、渡辺七三郎氏等一流俳人を招き盛大に行なわれた。またその頃『俳句研究』主催による高尾山全国俳句大会には、楠本憲吉、金子兜太、見学玄、などと共に臥丘は招かれて大会選者となる。





順風に帆をあげた数年間であったが、十周年の翌年、昭和三十七年十一月六日臥丘は交通事故にあい五ケ月入院約一年間の療養と言うことで『霧の音』誌休刊の止むなきに至った。霧の音にとっては出鼻をくじかれた大きな打撃ではあったがこの間熱心な作家は個々に作句活動は続け、まる一年二ケ月後昭和三十九年一月復刊。通刊一三〇号復刊一号を出すことが出来た。会員、誌友約三分の一が減り、経済的の理由からも止むなく活版刷りも再びタイプ印刷に戻り、毎月発行も隔月発行として出発した。

『霧の音』としては再び苦難の道が始まったのであるが、臥丘の多忙から編集を河村四響が担当するようになり漸次活発な活動となり、内容の充実と相まって会員も増加して来た。

昭和四十一年には盛大な十五周年大会を開催し、『霧の音』句集第五集を出すに至った。この間の事情と心組みを伝える意味において第五句集の序文をそのまま掲載することにする。

十五年といえば一昔半、長い歳月にちがいないがあわただしい世相の変動に心休まるひまもなく、私達に時間の観念を麻痺させてしまった感さえあった。その中に於ける俳句界の消長推移もまためまぐるしいばかりで、さらにこれが又将来へも続く短詩形文学俳句のもつ宿命的な発展の行路であるとさえ思える現状である。

さてこの推移の中で生まれた私達の俳句は多摩地域の自然と生活に深く根を下ろし、その中にあって地域の既成俳句に惑わされず一人一人の情感を詠いとどめたいと願う者の集まりであ

り、むしろ俳句にはじめて手を染めた人が大多数であった。それながら俳句の概念砕きにも似た勉強が相当の期間続けられその作品にも千差があり、十七音、季語などと言う俳句の制約さえも己れの詩であると言う基本的な作句態度を失わないため、しばらくは目をつむる状態が続いたのであった。

この集に載せられた百余名の作品は、会員の約半数であり、十年以上の俳句経歴をもつものから一年に満たない作家の作品であって、いわゆる世に成果を問う作品群ではなく、記念的価値だけに終るものであるかも知れない。しかし私達はこの刊行を契機に更に意欲を燃やし、「自分の俳句をじっくり育てる」次の段階へ進みたいのである。

広い範囲にまたがった大きな結社と違う私達の集いは少なくとも年に数回は全員顔を合わせることの出来る、つまり嘘かくしの出来ないこの間柄は、温い人間関係とは別に、作品に対してはその作者の人柄を知り風土を同じくすると言う厳しい目が向けられるのであって、この地域結社としてもつ長所を充分活かすことができるわけである。

諸兄と共にこの集の刊行を喜び、さらに発展への努力を続けたいと思う。

昭和四十一年六月一日　　来住野臥丘

以上原文そのままのものであるが、これから当時を推察願うと同時に、俳句の記録は作品がそ





のすべてあるので、『ふっさっ子』に関係を持つ作家並に作者を抄録する。

袖で拭き柿の艶見ず少年工　正光
二重虹原爆平和会議われる　胡苑
あかぎれに鍋炭しみつき晴続く　文沙
荒々し少年通りて萩こぼす　和代
レース玉ころがり春宵広がる夢　糸藻
泣くだけの子等の抵抗露地寒波　祐峰
宵宮の森の銀河へ手〻流れ　梓
手馴れし厨別れを磨く夕べの秋　伊吹
田草取るうつむき声の田を出でず　四響
濯ぎ終えし手の若やぎに夏みかん　未萌
春一番子もち鰈をうす味に　津曲女
秋の暮語るごとくに風呂火の焔　青花
夏草も病むや身ひとつ安静に　銀嶺
寝衣のしめり声の雲雀は熱の底　虹晨
熱気吐く夜の向日葵癌恐る　童声子

露店の灯霧が来て巻き七夕果つ　明石
二重苦のまた爽やかに指話かわし　北紫
梅の香の暗きに馴れし蚯口の位置　溪花
子を抱きて長き貨車見る梅咲く下　早苗
雨冷えの立ち座りして木賊の青　亀白
水すまし汝は汝が生める波紋に乗り　八千代
いじめ鶏隔離す花の雨の中　当子
父と子の音立て暗き田掻きおり　彩志
赤とんぼ風呂水しまいの一荷となる　鞆絵
飯餅練りし粉が小爪に脈計らる　岬
仔雀の尾をふる畑に夫も居り　稀世
少年の密議春野の深い窪み　逸平
火蛾打ちて心たがうを知りつゝ居る　蓉玉
今日よりは明日を待つ赫牡丹の芽　吾峰
花合歓や嬰児は指をにぎり眠る　芙蓉
猛りもず病みていよいよ夫寡黙　美穂





冬の芽の確かさ黒き爪で触れる　玲川
露天市に驟雨が溜る皿買えり　嵯峨野
冬銀河娘の齢に我れ嫁ぎいし　梨花
時逝くや塔なき礎石蔦かずら　秋歩
髪薄き夫の頭にのみ雪降り来る　草衣
鵯鳴くや宙に抱きゆくうどん玉　衿羽
夜濯ぎや子のポケットの小石に触れ　翠芳
目に一ぱい飛び込む青さ麦の伸び　さだ
母ありて七草粥炊く航空路下　臥丘
蛇見しあと金色匂う女身仏　〃
跛ひきて冬空奥の奥まで青　〃

抄録にしては少し多きに過ぎたようであるが、前段に書いた吟行の作品などと比べたとき、作品としての歩みを見ていただく意味においてあえて書き連ねて見た。自然、社会、生活、自己の内から真実の詩を詠い出し、生命の証しを綴ろうとする作句態度が見えて来たように思えるからでもある。

この句集刊行の十五周年を境に『霧の音』は第二期の興隆期へのきざしが見えて来た。そして

更に高い詩の次元への努力がみなぎりはじめている。霧の音は排他的だなどと言う声も影をひそめ多摩地区全域からの会員参加を見るようになって来た。

たまたまこの年昭和四十一年から主宰臥丘は「サンケイ新聞」東京版多摩文芸の俳句選者となり毎週一回武蔵野市以西のサンケイ新聞読者の投稿を選句し新聞紙上に発表するようになった。当然新聞を通じての読者作句者が入会して来た。更に四十五年一月には、臥丘第一句集『冬樹林』を出版した。内容は句数約五百、加藤楸邨師の跋文「冬樹林」私抄を含め二百二十五頁「北楊書房」より発行、定価八百円（現在残品なし）。

各地に支部十一。会員約三百名、霧の音を基盤に中央俳壇で勉強活躍する作家も多く出るようになり、本年七月には満二十周年を迎えることになった。

戦後、基地の町福生に誕生した『霧の音』が一地方誌として使命を終え、日本古来の文芸を多摩の地に生かし更に日本俳壇の『霧の音』に成長しようとしている。復刊後の隔月発行も本年十月から毎月発行にすることが決定。遊びの俳句と思われがちであったものが、俳句文芸として素朴な多摩の風土の中から多くの会員の情熱と努力により世に出ようとしている。主宰者である私が自画自賛に似た文章を多くまたそれをもって結文とすることをまことに不遜と思いまた思われることを予想するものであるが、このことは決して私の力ではなく、五年十年長くは二十年の間俳句文芸一筋に情熱を傾けた三百余の同友をたたえる語として寛恕されたい。現在百七十三号毎





号、四十二頁。

終りに現在会員の作品を抄録しこの稿を終る。

拗ねし子がものゝ芽愛し暮色濃し　文沙
立秋の白衣に孕むまぐれ風　青花
やわらかに骨煮る月の出の岬　逸平
春禽の粒ほどの糞森に降り　生泰
迎火の闇聴く母に添いにけり　みさ子
手の通草より美し高く残る通草　玲子
暮れきるや峡の早瀬に冬棲みて　喜美子
かまど火の奥を紅蓮に三眠蚕　衿羽
霧の海日輪型なく漂いし　花簿
寄れば笑い蛙聞えてとまどいぬ　岬
夜濯や夫と出合いのいくさの歌　鞆絵
靴底に砂丘なじまず夏の雲　秋歩
雪はげしき夜を海色に工油澄み　彩志
ほうずきの芯甘苦し誕生日　翠芳

強霜の滴り猫眼の光りもつ　未萌
八重桜艶冶におわす仏達　佐多
馬鈴薯の花のうすいろ母けぶる　夏枝
車とんぼ金環となり翅休めず　糸藻
渡り鳥見えずなりたる空のこる　幸代
冬の雲指より細きごぼう買いぬ　溪花
おいらん草激しくゆれて夜の雲　信子
ひとり旅思うだけにて雲母雲（きらくも）　放吟
瀬ぎわの石秋光温み土落す　亀白
ちちろの声沁みし朝荷を市へ出す　稀世
啓蟄や小屋でし鶏のとぶかまえ　北紫
ひぐらしの声のうすらぐ旅衣脱ぐ　みや子
獅子頭樹間洩る日をきらと振る　緑翠
母の日の緑が透ける老わらび　当子
冬の蜂死せる虎斑の鮮やかに　のぶ子
しづくして霧の日の出の白桔梗　とよ子





銃口より冬空の奥の奥のぞく　童声子
雪積むらし術后の眠り平らかに　芙蓉
夫にある長き眉毛に夜涼の灯　美穂
一族のかたまり寄れり炎暑の墓　幸子
焚くごみの煙りとどける毛虫の枝　さの
竹林の奥の深さの冬の声　初子
篝火に口あけて声出せぬ鵜ら　春美
手にもちて素焼のかるさ野菊晴れ　鈴代
豆を煮る母でなければ燃えない火　笛吹
巡回簿へ足長き蛾のふわりと来る　澄夫
火を焚きて仮眠五月の貨車匂う　芙美男
母子寮のまわりからたちの白き花　千代
大寒の水呑む太きのど仏　新作
米とぎて光らぬ爪よ戻り梅雨　道子
サイネリヤ透明な皿敷きて置く　雪枝
わずかの間の父子の空を雁渡る　きみ子

捕う蛾の薄紙透す赤き息　ちゑ
囀りに日輪厚き雲を割る　霞郷
でで虫や夜を離れゆく幹直に　玄寿
墓寺の僧の毒気に当てられしと　原子
緑蔭を出て日の粒の耳飾り　綾子
巴旦杏の熟れ色映るガラス拭く　唯々
平穏な陽光賀状束ねて来る　津曲女
しなやかにちりめん皺の干大根　はつ
春雪を踏むやふぐりの小さゝで　精一
手斧柱に三代の罅柊挿す　芙沙
遠花火指の翡翠が青さ溜む　嵯峨野
足袋ぬぎて胼さすり合う友といる　伊吹
鰯雲目細め糞まる波戸の牛　明石
蜩の腹透きとおり土工帰える　祐峰
捨てタイヤ囃すが如く芽吹きおり　蘇丘
間引菜の青より覚めて虫歩む　和代





芽吹く野へ切られても鉄噴く物なし　正光
翡翠や渕を出られぬ一流木　あつし
川霧の深しまい〳〵家落すな　虹晨
焚口に寄りつゝちちろ灰まみれ　春子
水音のみ群れねば蚪蚪は淋しきか　梨花
旅に倦む父の匂ひの冬帽子　四響
冬すみれ時の不思議をおもいをり　臥丘

（青梅第四小学校校長）

## 福生市文化財調査会

立川愛雄

昭和三十九年夏、東京都教育委員会では、西多摩北東部を占める多摩川扇状地およびその周辺に遺存する文化財の現状を把握し、今後の文化財保護の資料とする目的をもって、青梅市の一部（旧青梅町・霞村・調布村地域）・羽村町・瑞穂町と福生町に、「西多摩北東部文化財総合調査」を実施した。

これは、昭和二十九年、ダム建設によって水没に迫られた、「西多摩郡小河内村の文化財総合調査」が契機となって、都内の地域別文化財の総合調査が継続実施されていたその一環としてのものであった。

この結果は、昭和四十二年三月『東京都文化財調査報告書第十九号』として報告されており、その内容は次のようであった。

一　西多摩北東部地区の植物
一　同　人文地理
一　同　考古学上の調査
一　同　社寺建築調査
一　同　民家
一　同　所在古文書類調査
一　青梅の芸能

以上が調査団長、本田正次博士以下各界の学識経験者および郷土史家の参加と、地元教育委員会の共同調査による成果である。

福生町教育委員会では、本調査が実施されたのを契機として、調査に参加された方々や、町内同好の士に呼びかけ何等かの組織化を目指し〝福生町郷土史懇談会〟を開催した。





会を重ねるうち、これが具体化――町内の文化財に関することを調査研究し、資料を集め、また町民に〝文化財を愛護する〟よう啓蒙することを目的とした団体を結成しようということになった。

それについては、教育委員会の素案を基に特にかつて『福生町誌』（昭和三十五年度刊）の編さん委員であられた町内小、中学校の先生方の意見開陳を求め、会名については、斯界に活躍の木村東一郎先生の発議を忖度協議し、〝福生町文化財調査会〟として、町内同好の士を糾合し、昭和四十年四月二十七日結成をみることになった。

規約第三条（会の目的）には

「本会は会員相互の提携により、町内の文化と自然に関する実施研究、調査を行ない、その愛護を図るとともに、町の文化行政に寄与することをもって目的とする。……」

とし、このためには、

一　資料の蒐集・調査・研究・保護
二　調査・研究事項の発表報告、研修会
三　町民を対象としての史談会、資料展示会、講習会の開催
四　〝広報〟等による一般町民への啓蒙
五　他の調査・研究機関への協力

六　その他、本会の目的達成に必要な事項などの事業を行なう（規約第四条）

そして、本会の趣旨に賛同する同好の士をもって組織することとした。

発会式当日、役員として、

会長　清水寛二

副会長　清水延一、同　内田満蔵

事務局長　森田潤三（町教委）

各氏を推挙　就任をみた。

爾来、その目的達成するための諸事業を実施してきたが、毎年秋の文化の日を中心として催される、文化祭行事としての〝文化財展示会〟にその成果を発表しており、年毎の〝テーマ〟とその概要は次の通りである。（初期のテーマについては唐沢先生の発想によるところが多い）

昭和四十年度（第一回展示会）

○テーマ「火の歴史展」（灯火の変遷）――会員および一般

◎福生むかしむかし年表





◎福生町政百年（村から市への途）

◎福生地名考

（註）◎印は印刷頒布したものである。

昭和四十一年度（第二回展示会）

○テーマ「食物の歴史」（食器と備荒食）

◎福生の橋（十三橋の橋銘を拓本で展示）――拓本については渡辺安之氏による研修会開催

◎福生の橋（坂上洋之編）頒布

昭和四十二年度（第三回展示会）

◎福生の名木・巨木（写真と調査表展示）

◎福生の青石塔婆（四十二点の拓本展示）

昭和四十三年度（第四回展示会）

◎明治百年　福生小史（年表）作成刊行

同　教科書の変遷（二六七冊展示）

同　　ゆかりの品々（九〇点展示）――会員および一般

◎清岩院開基調査記録発表（立川・田村）

◎福生ひろい話第一・二集（森田潤三編）

○研修会　四月十八日

「福生町の文化財と文化行政について」　教育庁　金山正好先生

○講演・発表会　五月七日

「福生の金石文と種子（しゅうじ）について」　郷土史家　山上茂樹先生

「清岩院開基加藤勘助重正について」　会員　立川愛雄・田村元昭

○福生町文化財指定資料調査表教育委員会に提出。

昭和四十四年度（第五回展示会）

○会長更迭　四月十四日、清水会長が急逝された。氏は博覧強記、郷土史家として稀に見る





ものがあり、まことに痛惜に堪えない。

森田潤三氏を後任に推挙した。

○「玉川上水の螢と、その風致について要望書」を教育委員会へ提出（四四・七・一五）

○テーマ「福生の民間信仰」関連資料展示

◎石造遺物調（拓本・写真・其他展示）

◎福生郷土資料集第一号

◎福生ひろい話第三集（森田潤三編）

昭和四十五年度（第六回展示会）

昨年七・八月にわたって教育委員会の主催により（十一日間）長沢遺跡の全面発掘が実施された。

塩野半十郎先生ご指導の下、本会および市内小・中学校の教師生徒などが、市教育委員会の後援で作業に従事した。

この結果、加曽利EⅠ式および、同EⅡ式の形式（いずれも縄文中期）を持つ土器片を主とし、勝坂式・阿玉台式（同期）と、堀之内式（後期）を含む多量の土器片を出土した。住居址は、ほぼ全貌をつかめたもの二ケ所、住居址と推定されるもの四ケ所、ほぼ完全な土器が二個、復元

可能なもの六〜七個、石斧約百個、土製円盤が十数個なども出土した。

このため同年の展示は、福生の埋蔵文化財と、福生市誕生をテーマとして企画。長沢遺跡出土品と共に、市内に所蔵される品々を併せて展示した。

◎福生郷土資料集第二号　刊行

◎うしはまものがたり（森田潤三編）刊行

本会はささやかな集団ながら（会員十五名）同好の士が、有形無形の文化財を保護するとともに、市民の郷土愛を高めるためにも、文化財保護条例制定の日の早かれと念じつつ「温故知新」、先人からの文化遺産・史跡を守ろうと、叫びつづけるものである。

文化財調査会会員（四十六年四月現在）

森田潤三　清水延一　森田殷史　渡辺継二郎　並木秀　立川愛雄　森田清一郎　石川健一郎　野島茂雄　森田要三郎　大野忠一　内田満蔵　川辺進　伊東寿男　田村元昭　高崎正一　岩崎好亮　新井勝紘　藤田国子　野村雅子

特別会員

関根三木　木村東一郎　唐沢健一　小野沢博一　坂上洋之（ともに順不同）

（福生市文化財調査会事務局長）



# 道芝会

石川昌一

戦後の福生町青年団の文化活動を推進した者の一人として細谷利男がいた。また、戦前から戦後にかけての、福生町青年団の指導者としては、橋本孝蔵氏があげられる。橋本氏は、青年団活動そのもののほかに、スポーツ、文化活動、なんでもござれの教養高き指導者だった。

その橋本氏と細谷が団員に呼びかけて、青年団文化部の中に読書会を設けたのは、二十一年のころであった。

敗戦直後の大混乱から、徐々に立ち直りつつあった日本国中に、文化活動は急速にその動きを強めていった。福生の青年も目覚めるべし、と細谷は会員に読書を大いによびかけるとともに、その図書に関係ある演劇公演の見学などに、皆を誘って都心の文化吸収に出かけた。

帝劇で上演された「どん底」「罪と罰」「火山灰地」などは、今でも私には強い印象となって残っている。まだ若かった滝沢修、宇野重吉、薄田研二など、本物の新劇を見てずいぶん感激したものだった。

この読書会を永く存続させるためにと、井梅伊助はこの会に「道芝会」という名を贈った。路

傍の野芝は、踏まれても、抜かれても、たくましく生きのびていく。その野芝にあやかろうという意味であった。

二十三年には、結城孫三郎のマリオネット「杜子春」を招いて、福生一小を借りて上演し、福生の人たちに本場の味を知らせた。そのほかに、このような行動をともなった文化活動を活発に続けた。

ある時は、私のつてを求めて奥多摩の地に川合玉堂先生を訪ね、画道に精進される清談に接してきたこともあった。その時のこと、こんなエピソードを思いだす。先生の座敷に通されて、座卓をかこんで一同着座した時、井上裕之は、「失礼します」と断ったものの、足を前に投げ出して座った。先生の表情が一瞬、不快気になった。私はとっさに彼がこの戦争のために中支戦線で負傷し、足が不自由になったことを告げた。先生はとたんに正座し直して、井上に「ご苦労様でした」と声をかけられたのであった。

やがて時も移り、会員中には青年団員の資格を失い、また女子は結婚のためなどで、退会する人も目立ってきた。それらの状況から、細谷はその友人である珠算学校長の山崎茂男と相談し、二十五年になって、道芝会の本部を山崎のところに移した。全盛時三十名を越えていた会員も、このころは女子会員はゼロとなり、男子会員も次の顔ぶれだけとなっていた。





秋間重人　石川治一　井上裕之　井梅伊助　児島春之助　篠崎久治　並木正　細谷利男　山崎茂男　石川昌一

山崎のところへ移ってから、会員は昼休みとか夜なべにそこへ出かけて本を借り出し、ついでに大いに山崎に議論をもちかけた。山崎が議論好きになったのは、この影響が大である。かつての山崎は、ずっとおとなしい青年であった。

そのうちに、青年団時代とはまたちがった会員の親密感が出て、ときに読書のあとは酒もりを開いたりした。それがいつか病みつきとなり、本来の目的を忘れた道芝会となってしまった。このような時、東京都に勤務する児島は、本場のあかぬけしたかくし芸を披露して、皆を羨ましがらせた。そのいきすぎを戒めていたのは、井上裕之である。彼はいつもジュースにお菓子である。会の後半になって右に呑んでぐずる者があれば「もう呑むのはやめろ」といい、左に酔い寝してしまう者があれば「風邪をひくから」と毛布をかけてやるような役をやっている。

ところでこの道芝会では十年ぐらい前から、毎年一度旅行を実行している。お互いに年も加わり、それくらいの余裕が出てきたのである。その旅行先だけで女中さんたちに「この中で一番若いわねえ」なんて言われて喜んでいるのが並木正である。二カ月に一度ぐらいの例会に、八王子からも必ず出席するのが、秋間重人と石川治一であるが、読書だけの会だったらくるかなあ、と

思う時もある。

会場を提供し、酔っぱらいの面倒もみさせられることがある山崎は、さすが〝そろばんの先生〟で、ただでは会場を貸してない。酔うほどに論ずる仲間を見ると、すぐに筆をもち、その議論を『珠算学校月報』の「おとなの意見」などというところに盗用することしきりである。けしからんと思うが、後の祭。

四十二年の十一月二十六日、細谷利男が突然この世を去った。細谷は、農業のかたわら、養鶏にも力を入れていた。養鶏は大いに勉強をしていたようで読売新聞などに、養鶏専門家として紹介されたこともあった。そして農業と養鶏に忙しい身でありながら、いつも読書を続けていた。戦後の福生町青年団が、その活動の中で文化面にも相当の実績がみられたのは、この細谷の活動があってのこと、と言っても過言ではないだろう。細谷がいま元気でいれば、彼の理想に向って生きた、その格調高い名文章が、この頁に大いに飾られたであろうにと、細谷に心から詫びる思いで一杯である。

（少年補導員）



## 〝子どもの意見〟

### 自転車

小五　女子

うちのおとうさんはケチで古くさい。きょうだって私が、「新しい自転車買ってよ」というとおとうさんは、「自転車ならうちにある」と言う。

女の子は、五年や六年になれば、男のおとなが乗るような古くさい自転車はかっこ悪いのを知らないんだから。

おとうさんもPTAなんかへ出て、よそのおとなになにかそうだんしてくれればいいのに。

まったくちかごろのおとなは子どもよりせわがやけるなあ……。

（『ふっさっ子』第一集より）

ふっさっ子たち